



素立治簿前編
四

759
641
4



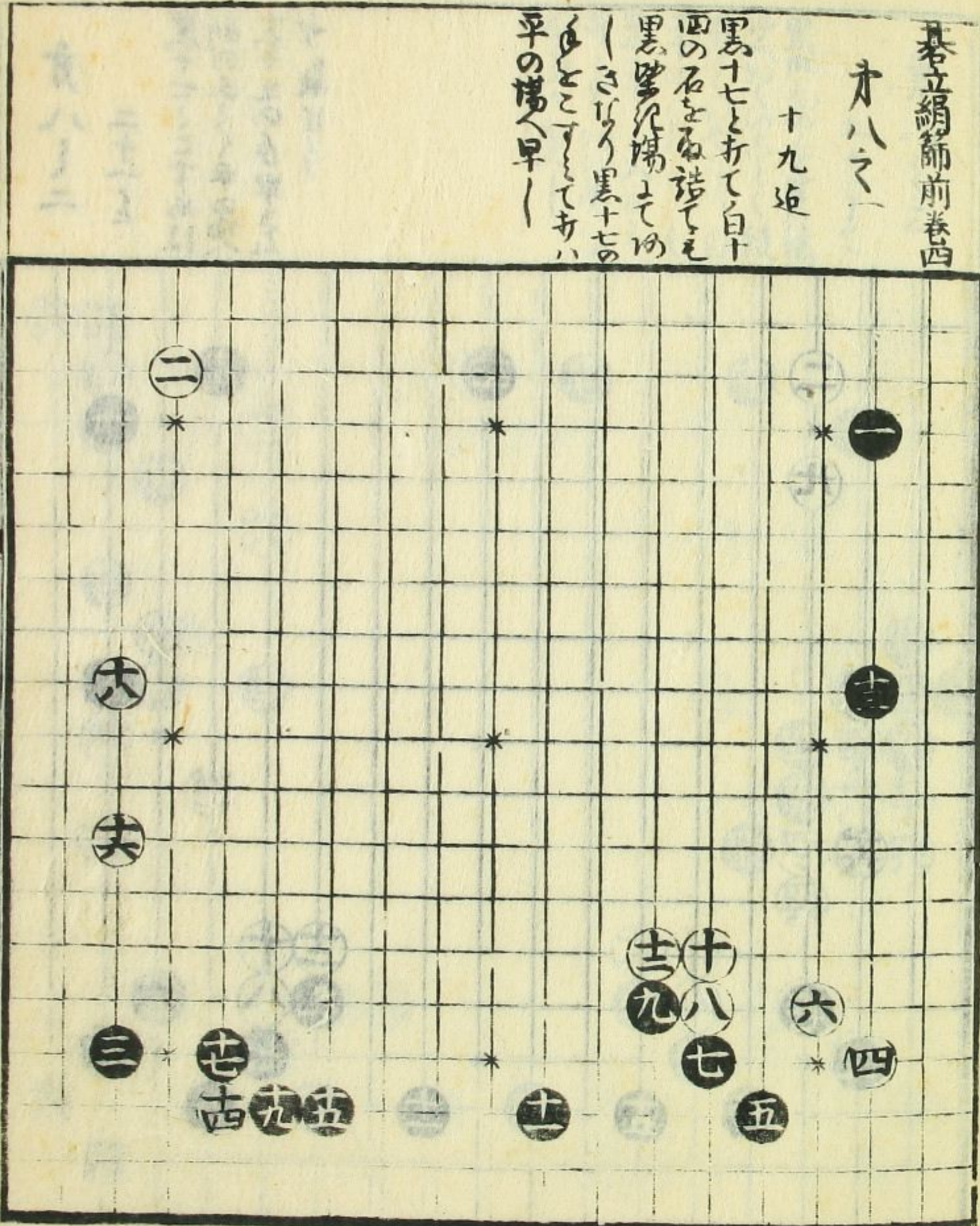


碁立綱節前卷四

才八之一

十九迄

黒十七と打て白十四の石をぬけて黒は碁盤に於て一さびく黒十七の石とすして才八平の場へ早一



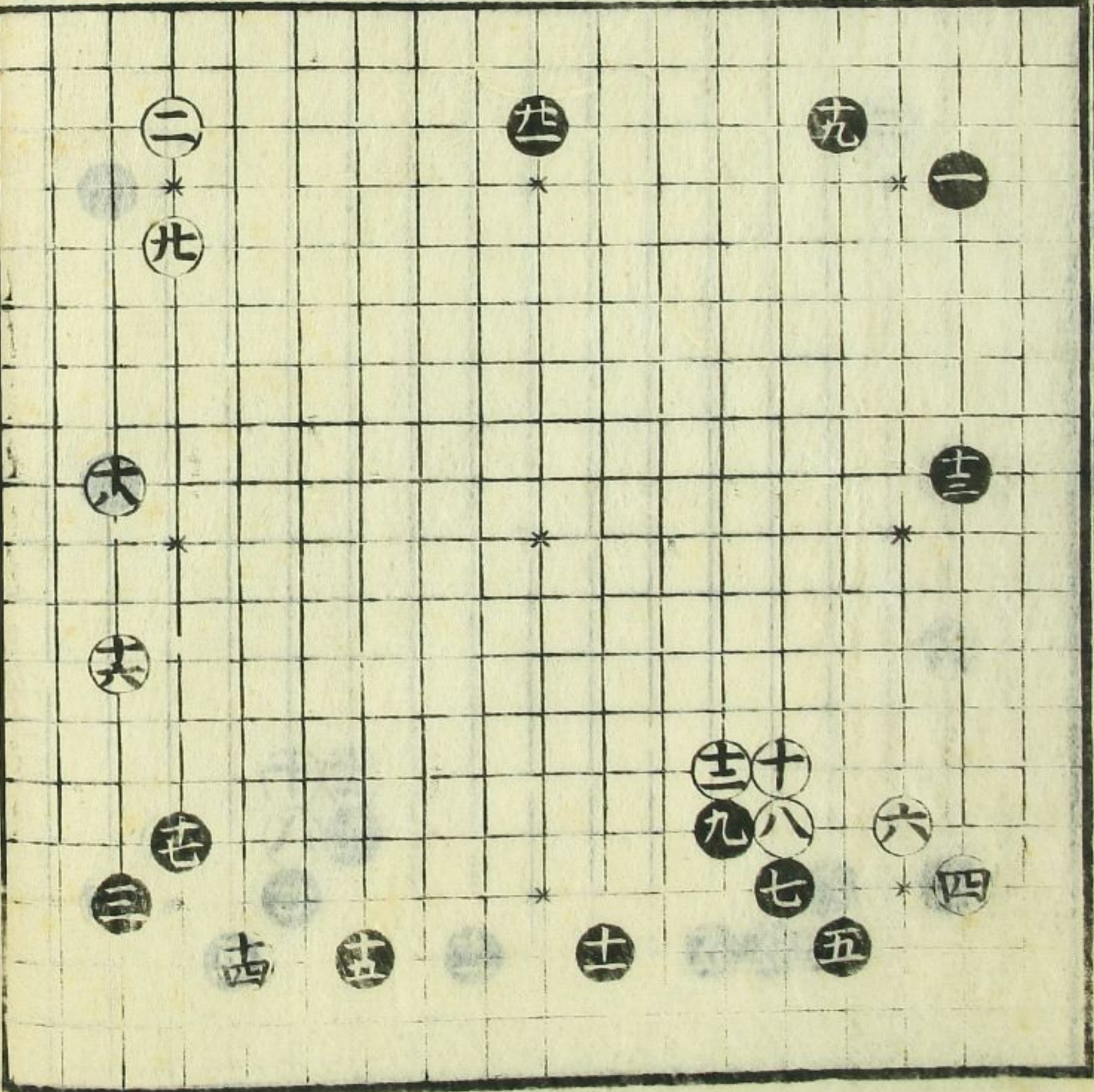
碁立綱節

卷之四

才八三二

二十一と

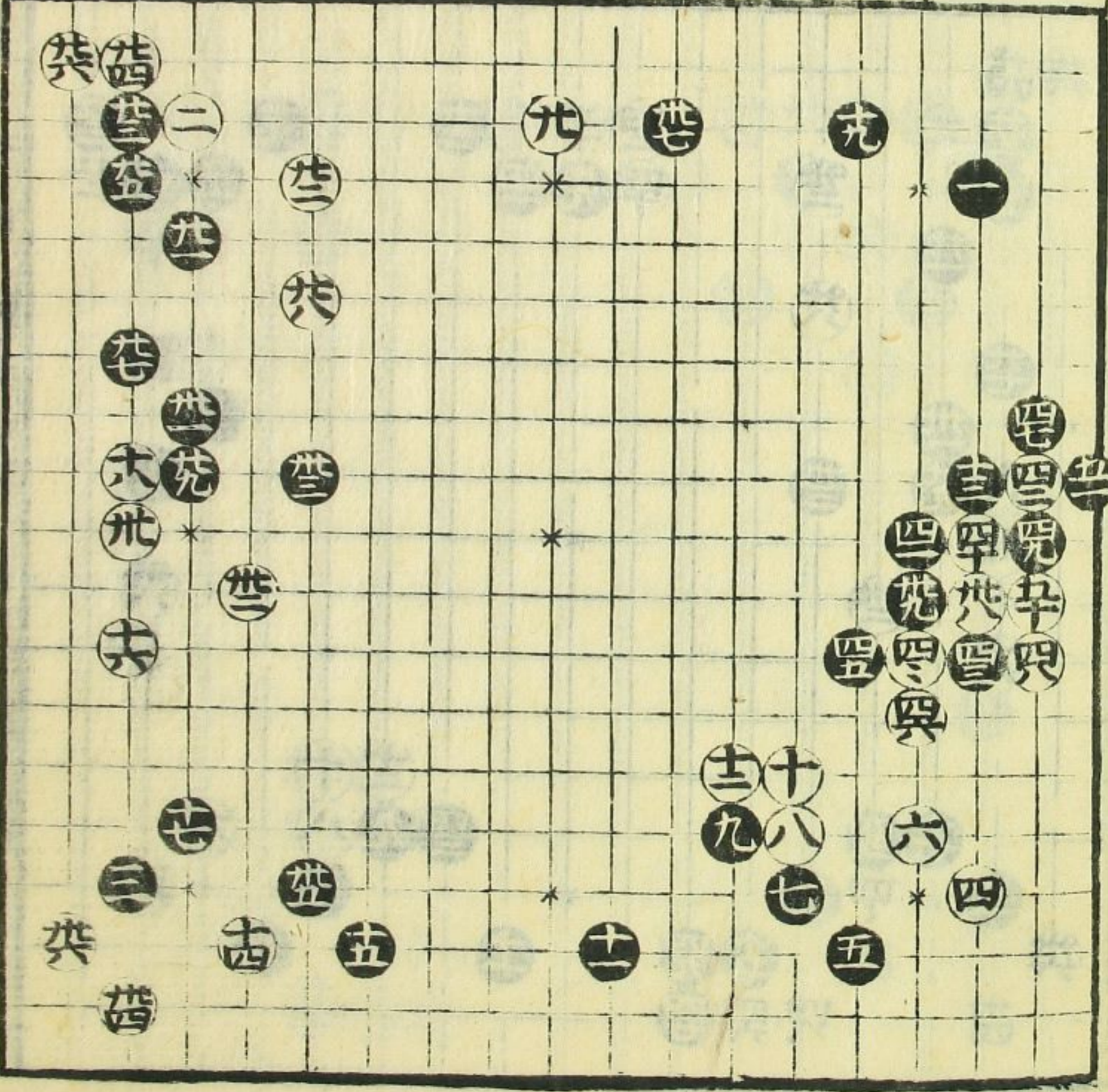
黒十七とこすめは
斯のふとく平の便
黒十九の子早き
奇能りり



才八三二

五十一と

黒廿九の子壁は
少くはとく平の便
有くはとく平の便
二十の子打てて
黒二十一と大目
奇の一切の碁に
心多う要る

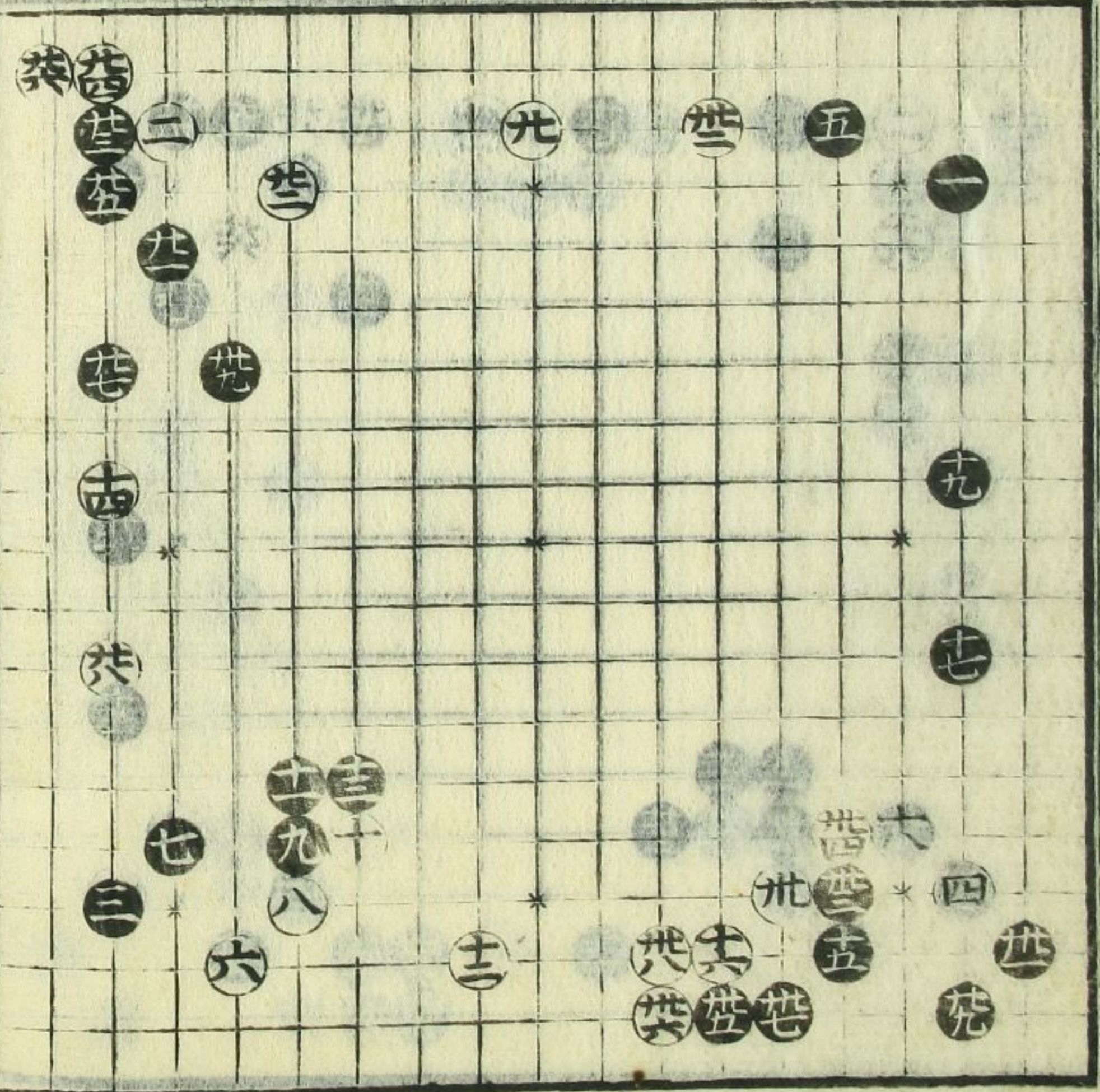


才八之六

二十九と

先の三はひねり
黒二十九のひねり
きねり見えてたに
合ひぬる也

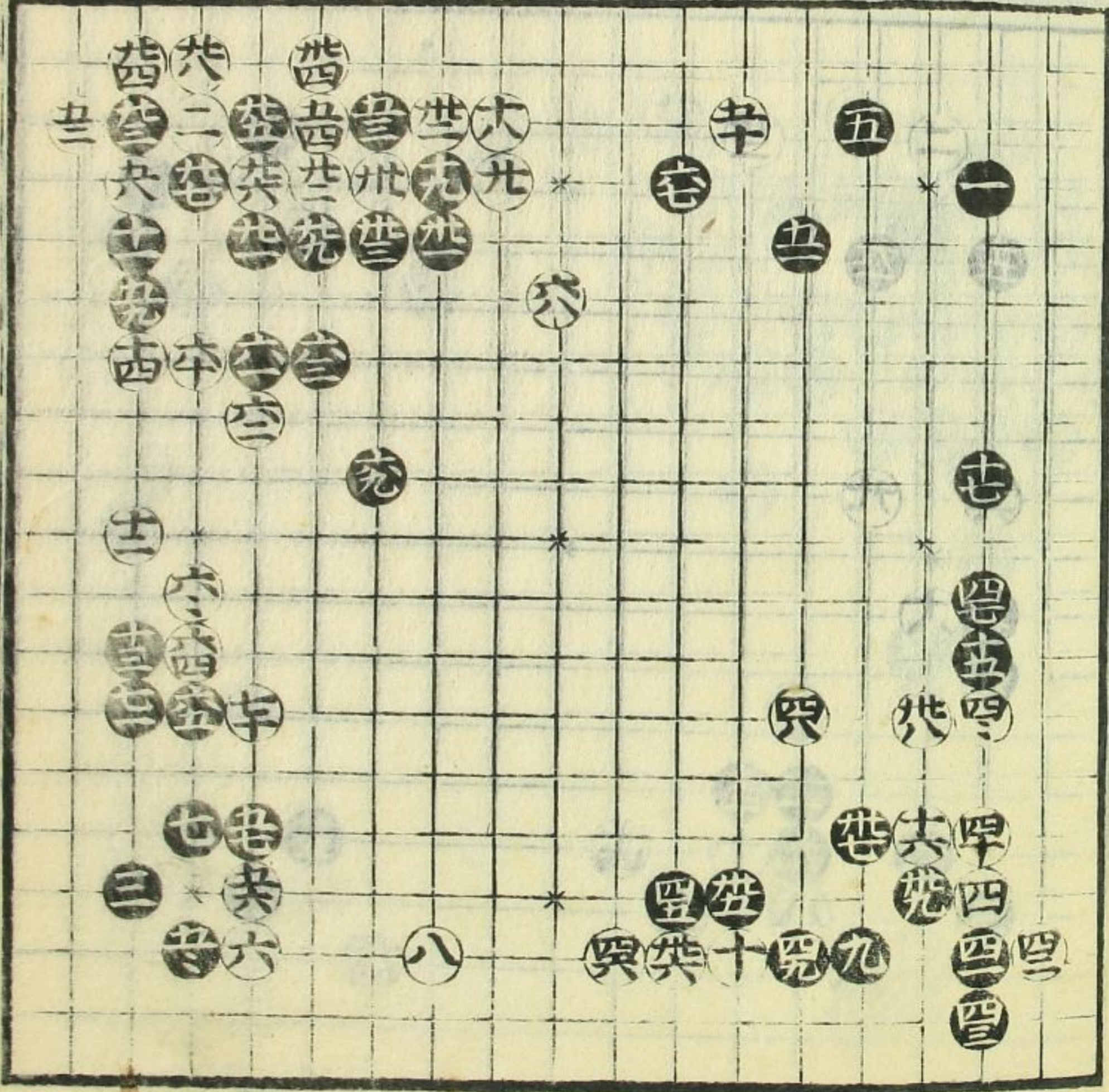
才八之五
三十一と
先の三はひねり
黒二十九のひねり
きねり見えてたに
合ひぬる也



才八之七

七十一と

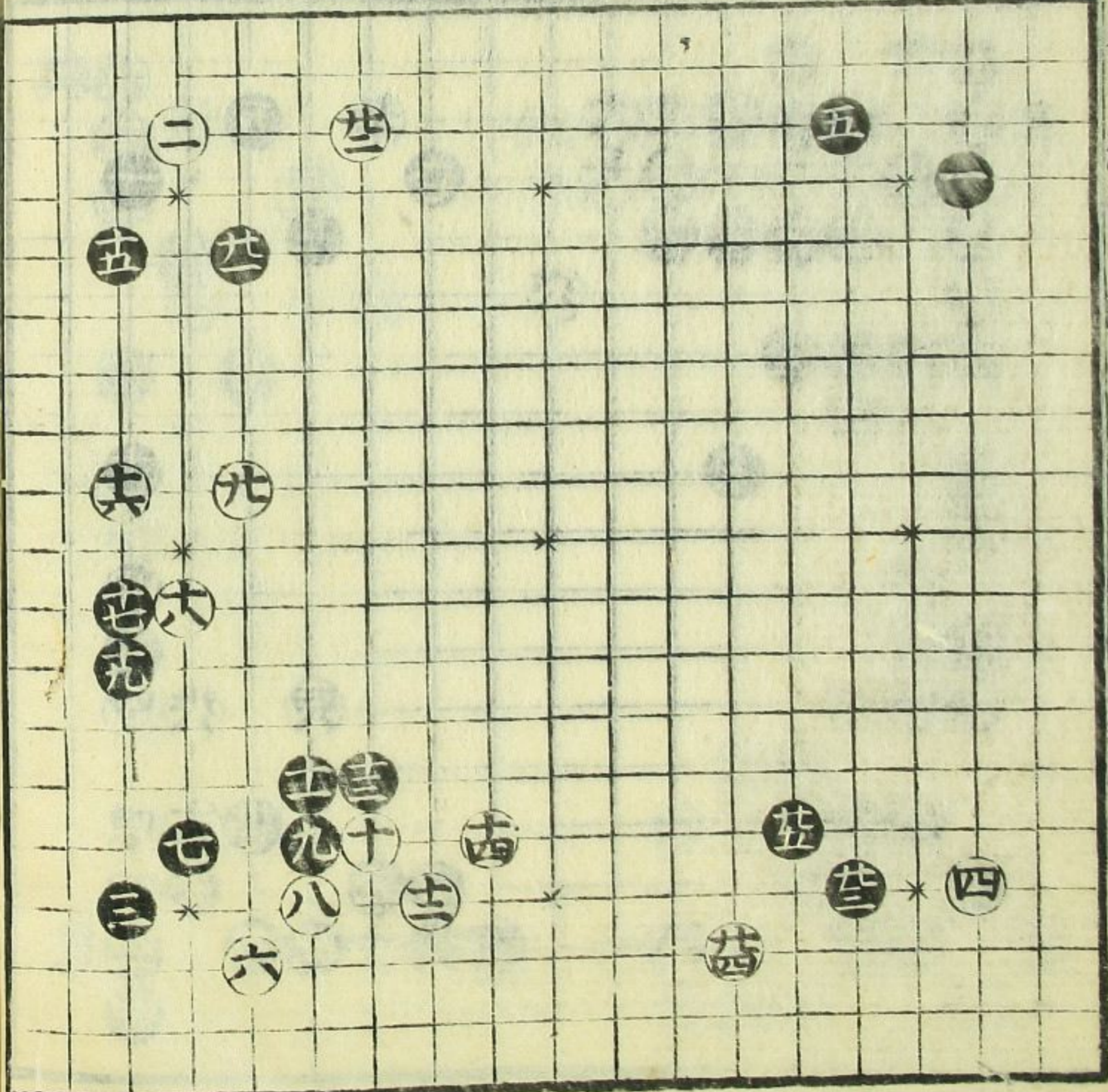
先の三はひねり
かひり



才八之八

二十五石

白十二の石新のこ
しく打て入場を
おぼくし黒より
五の石は打戻して
扱内黒の入場
おぼくしこ形
りるなり黒十二の
石二回打ち出す
しておのこせ
打ま平陽黒
取れり入場
少の石のわくおこ
き八の石の合

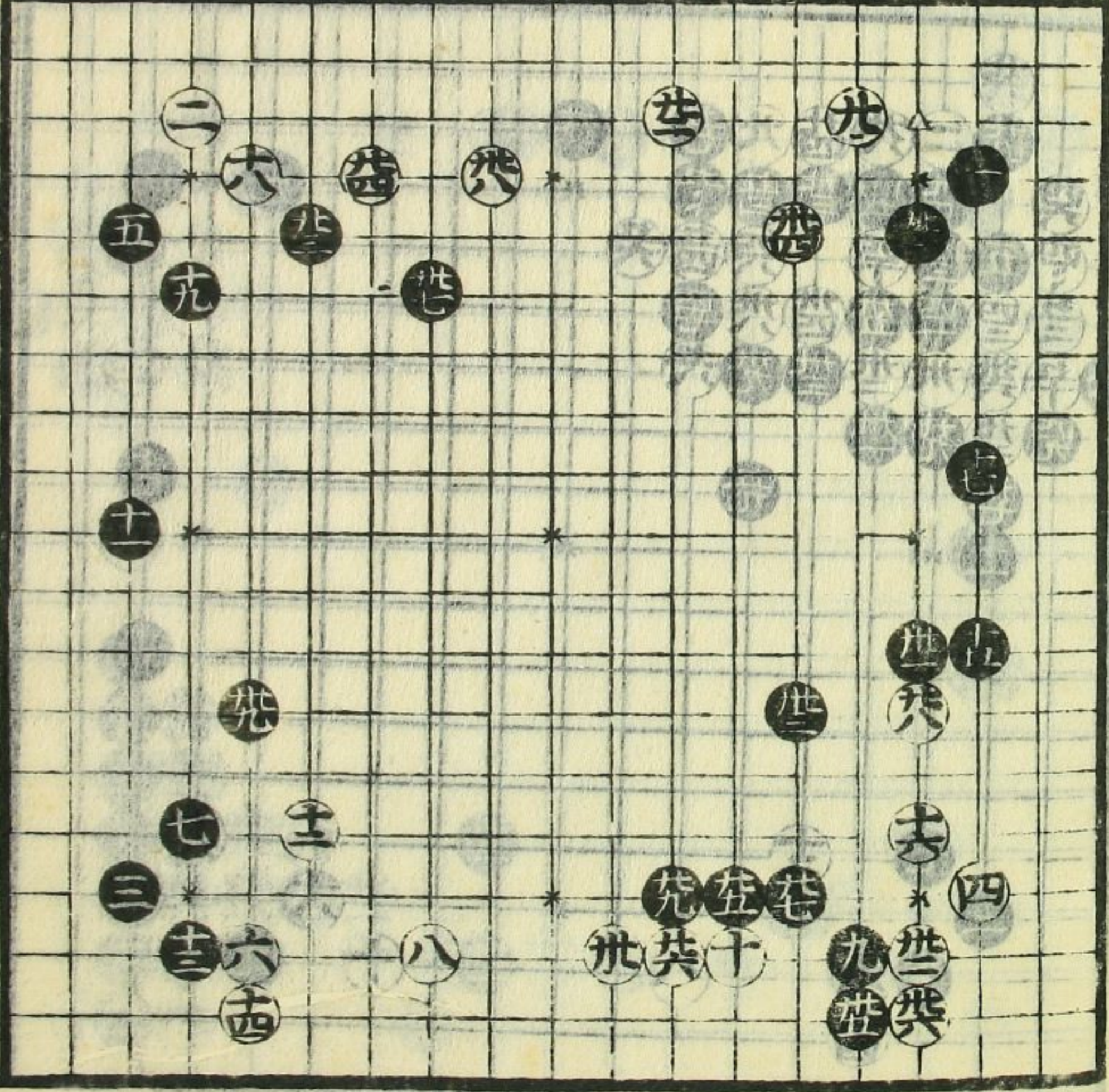


才八之九

二十九石

先勝入りし
二十七里愚慮
るも子筋よ見え
て此基はて八面白
し白二十四の両黒
より△石を
さ得るの八平陽
きりなり去り
せりきり見合
大事なり

才八之九
二十九石
先勝入りし
二十七里愚慮
るも子筋よ見え
て此基はて八面白
し白二十四の両黒
より△石を
さ得るの八平陽
きりなり去り
せりきり見合
大事なり

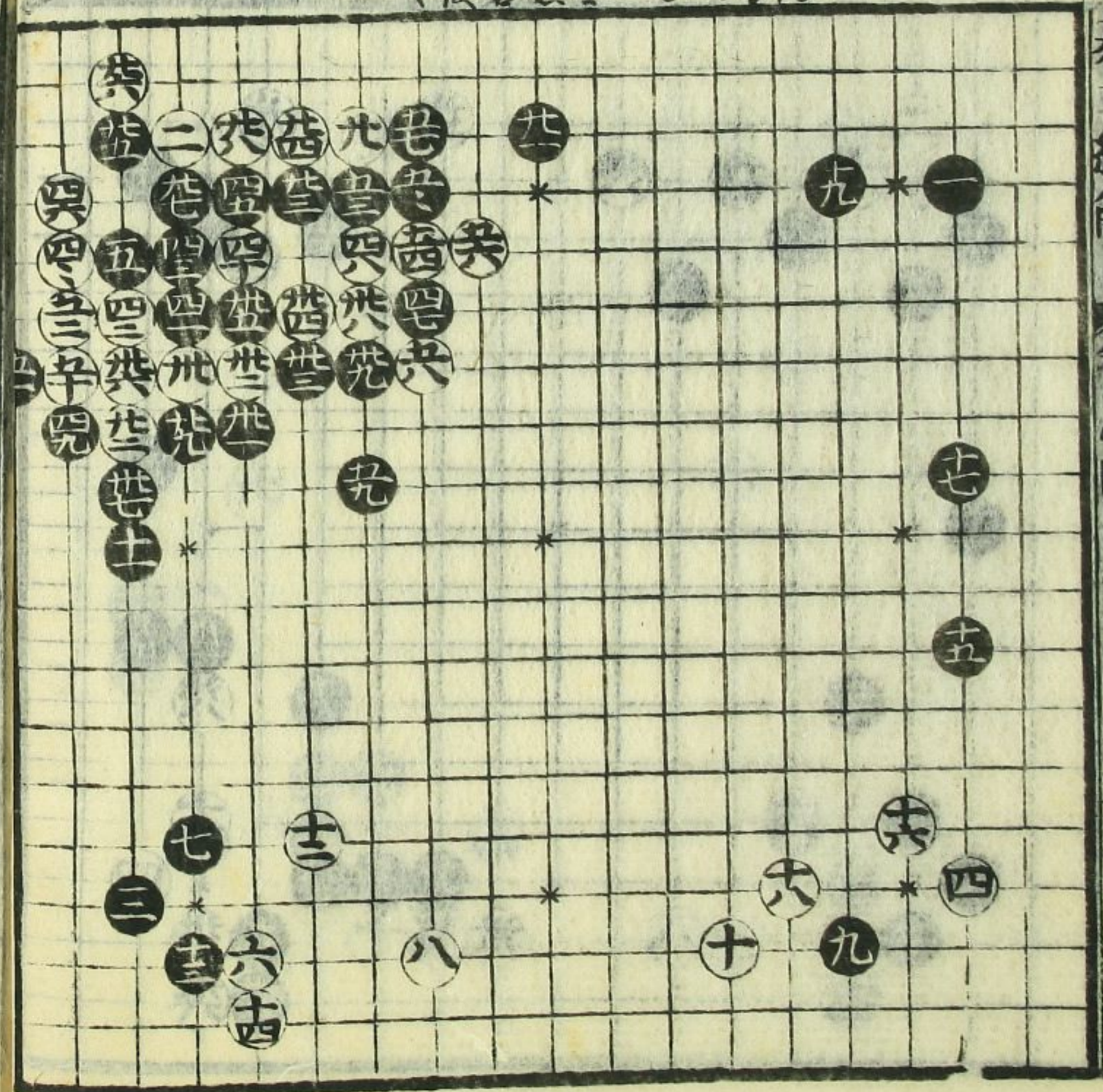


碁の綱目 卷之四

十八拾

五十九と

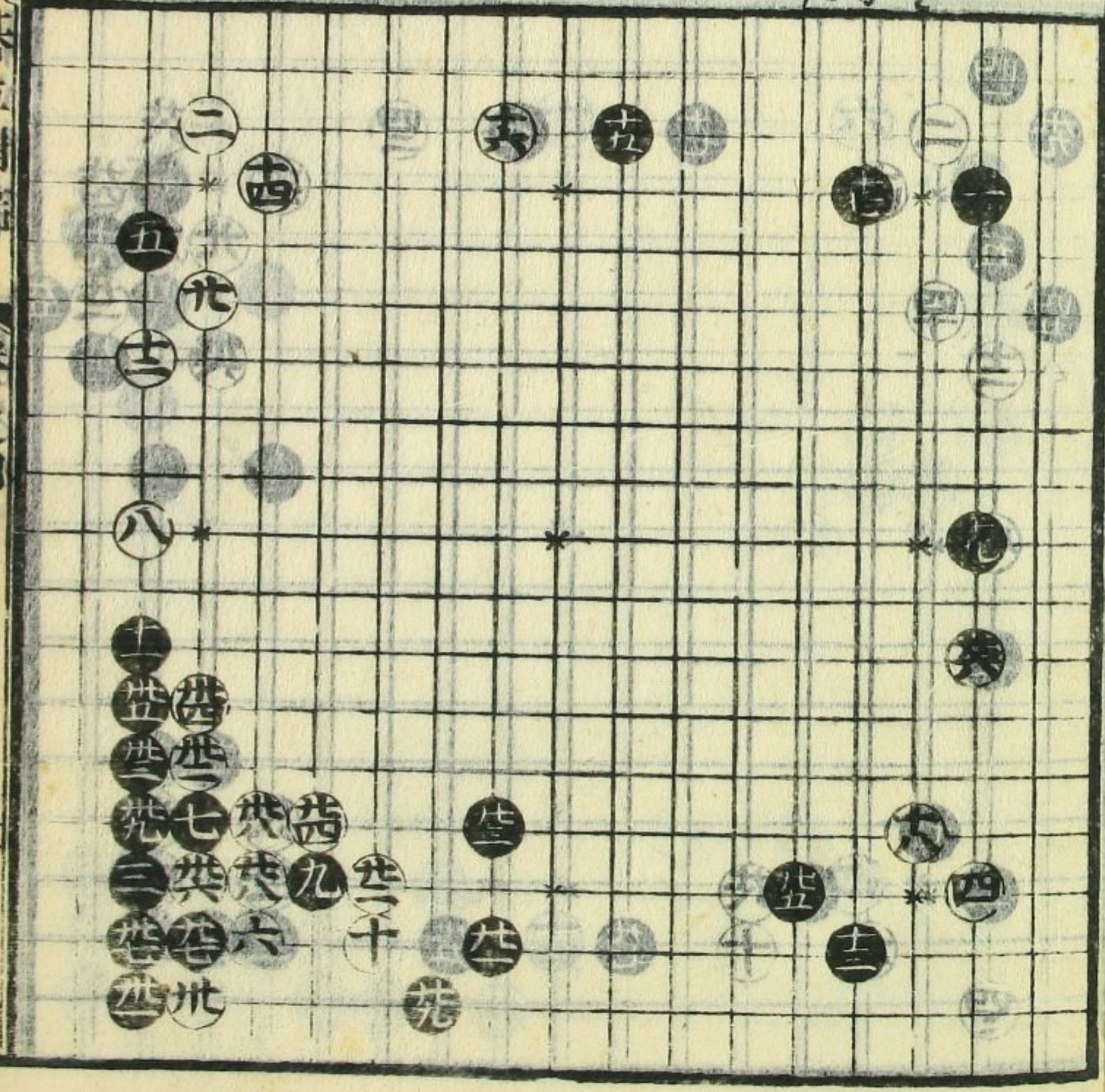
黒石一のむ新のや
おまぎくお強向
りへ黒女一の石は
内へ黒はふーよぬ
るへ黒石一と切
て、征は拂くも
白石八の石のひ
られた二十四の石を
直ぐへぬり時、せ
まも歩へ一征の後
はて黒のゆへ
おる



十八十一

三十九と

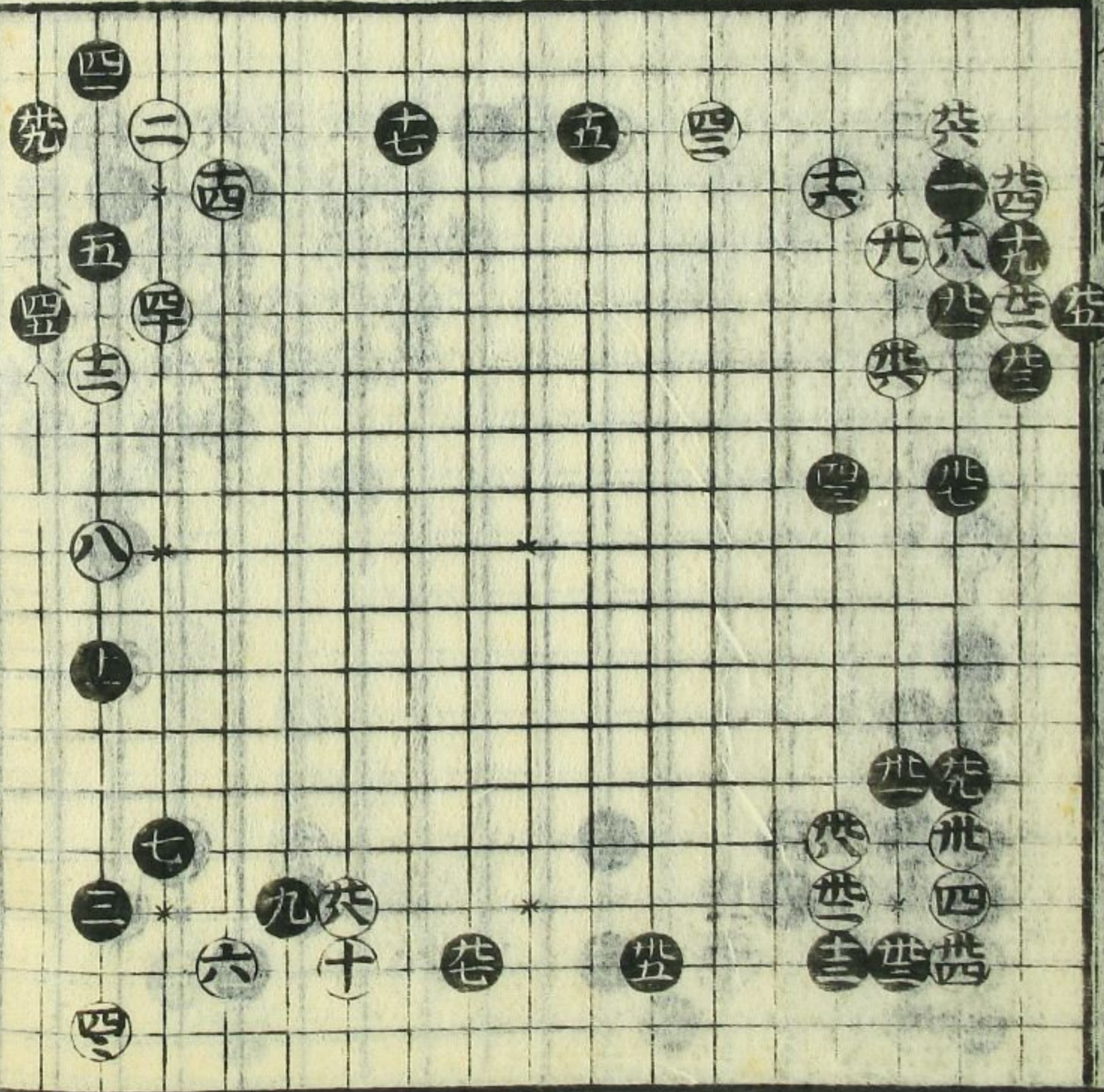
新のまへへ黒石
をかりて八黒は
るのあへらへ
黒石



才八十二

四十五まで

先の勢ひは黒
二十九より五まで
黒一切の基よあつて
神方より一里半
五の勢ひは白
並は白八の石二回
ちあつて肉をとり
如くさめり

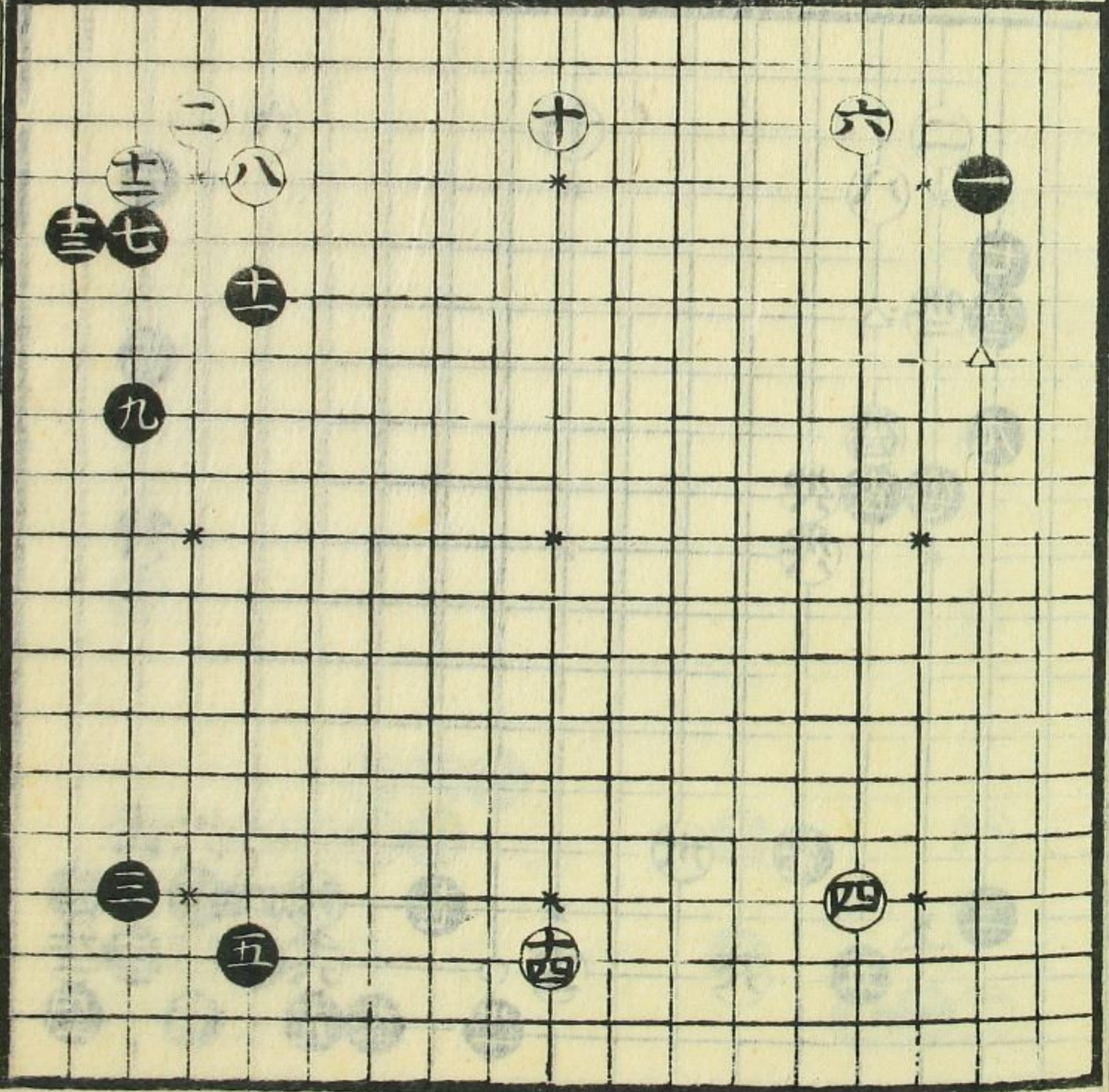


碁道新編 卷之四

才九十一

十四まで

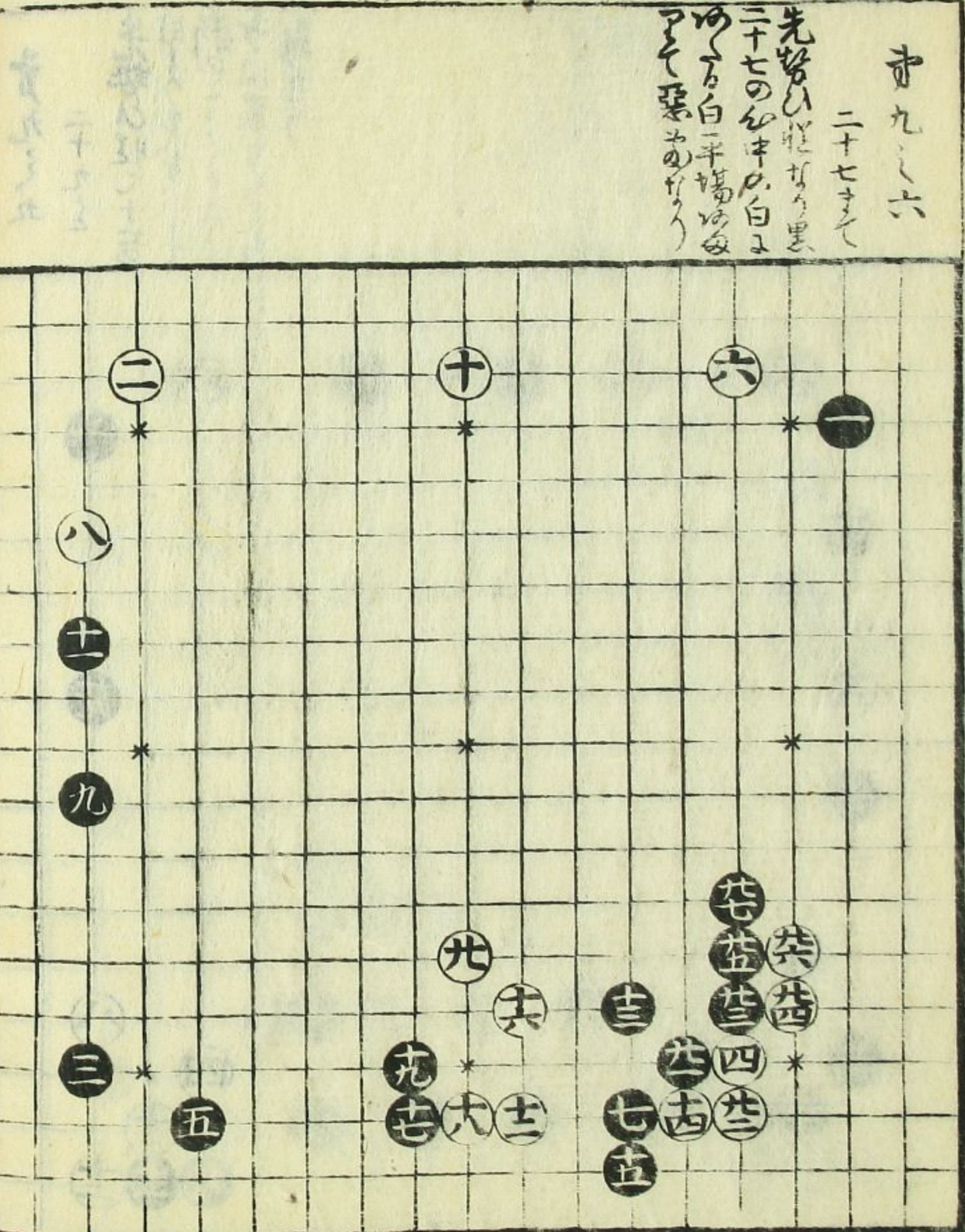
黒十一の石は
かりた動のこ
白は十四とあつた
附は黒はさつた也
黒の二と三回あつ
て△印打も定ん
がらう先を好
みくあつた
此石は立ちあつた
ゆゑ△印打も
事と此後を記し
て又はさつた
先



廿九、六

二十七まで

先賢の能なり
二十七の白の白
ゆゑ白二平場
アと葉あり



廿九之八

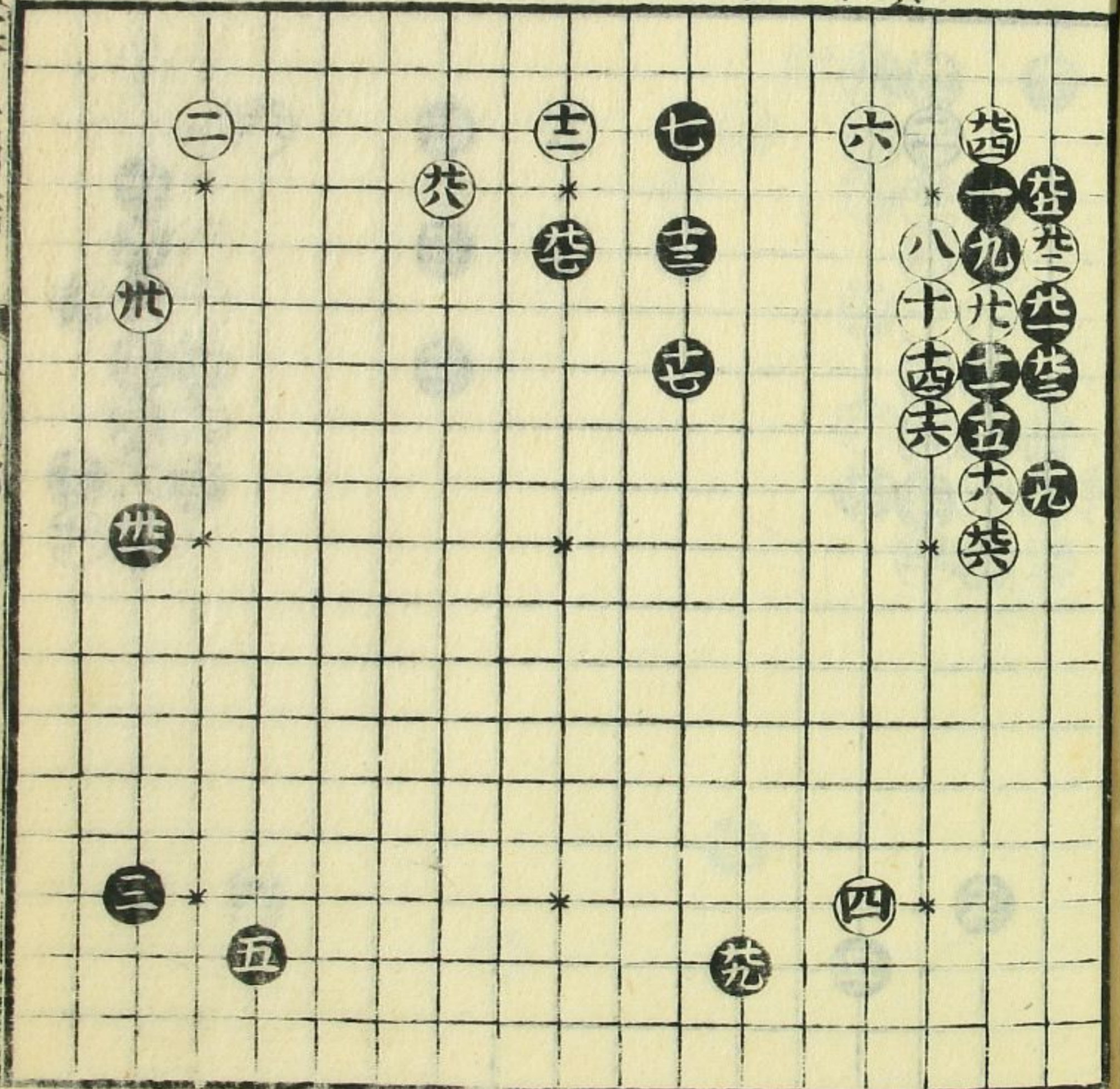
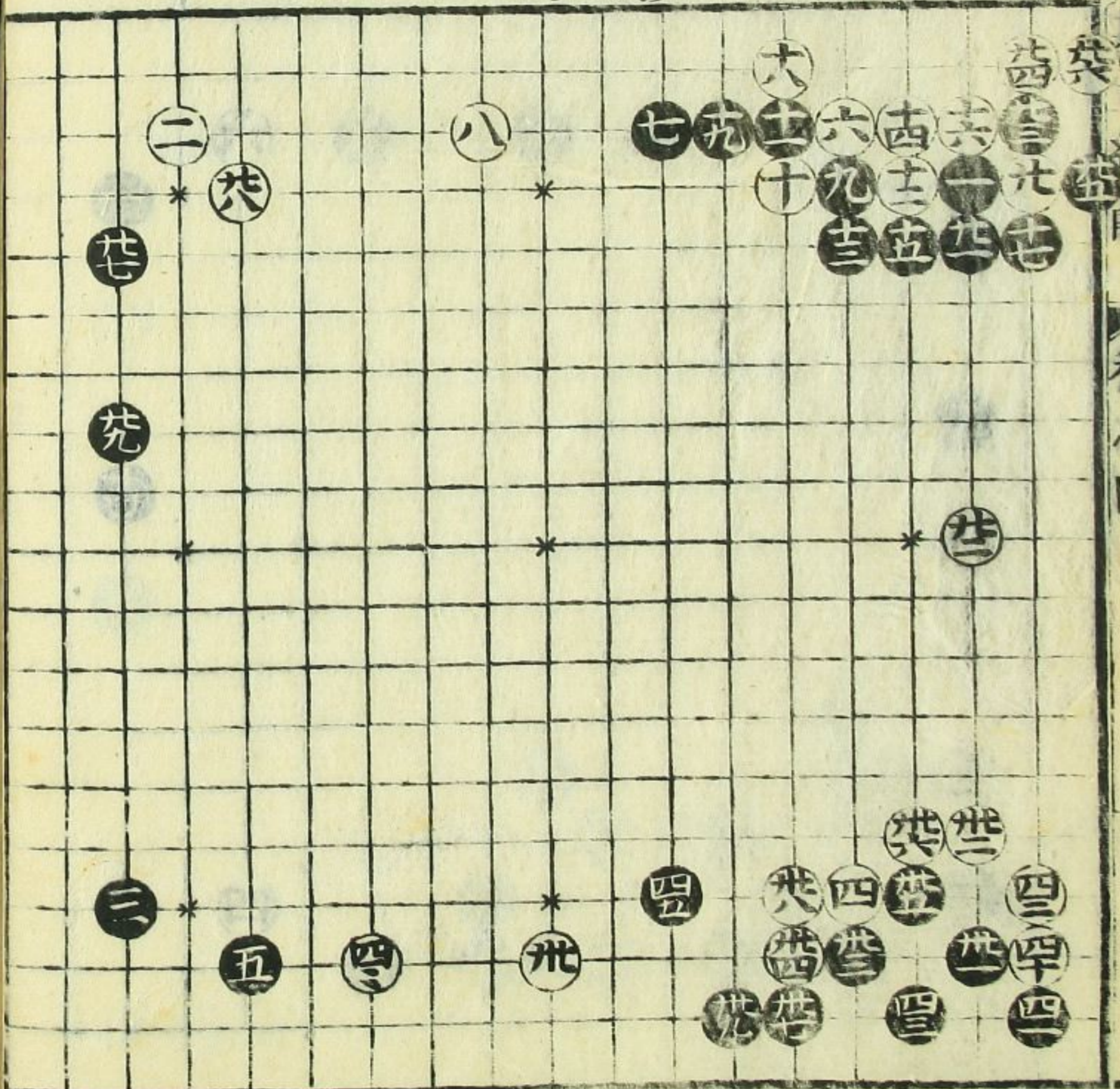
四十五まで

先勢ひきりかき
白四の大同、二
の石をとり合
三歩、黒は角とあり
てあるのありは
七と執りいづく
石と二回、三回
授る者、その
基より、廿九
十四よもとる

廿九之九

二十一まで

駒のゆくがうて
黒おしよき
た、先勢ひ
能く先勢ひ
収がる



才九し拾

二十四と

新のふくむりて
黒く黒六より黒
一と九の及白子
城へさるい神の有

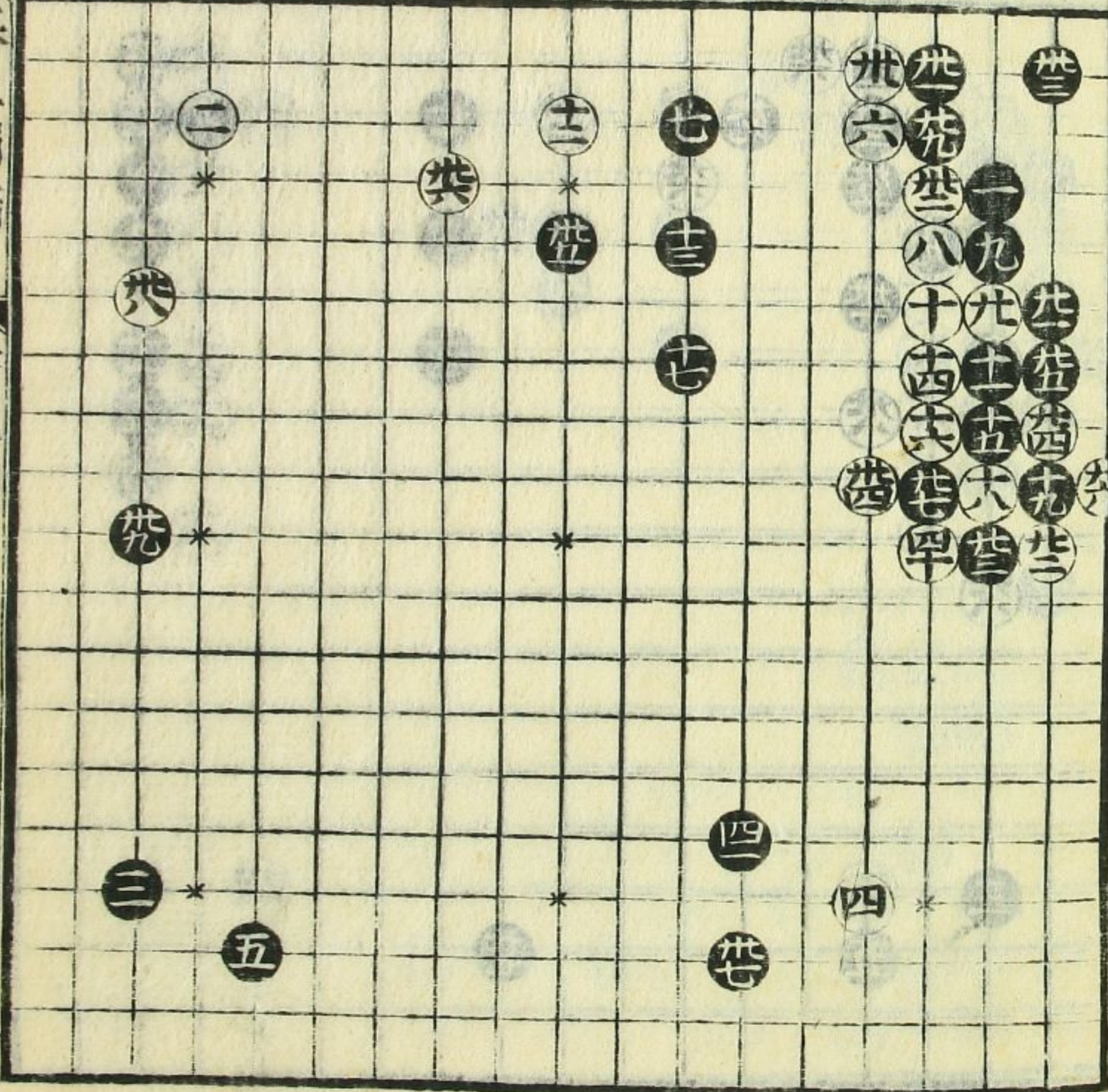
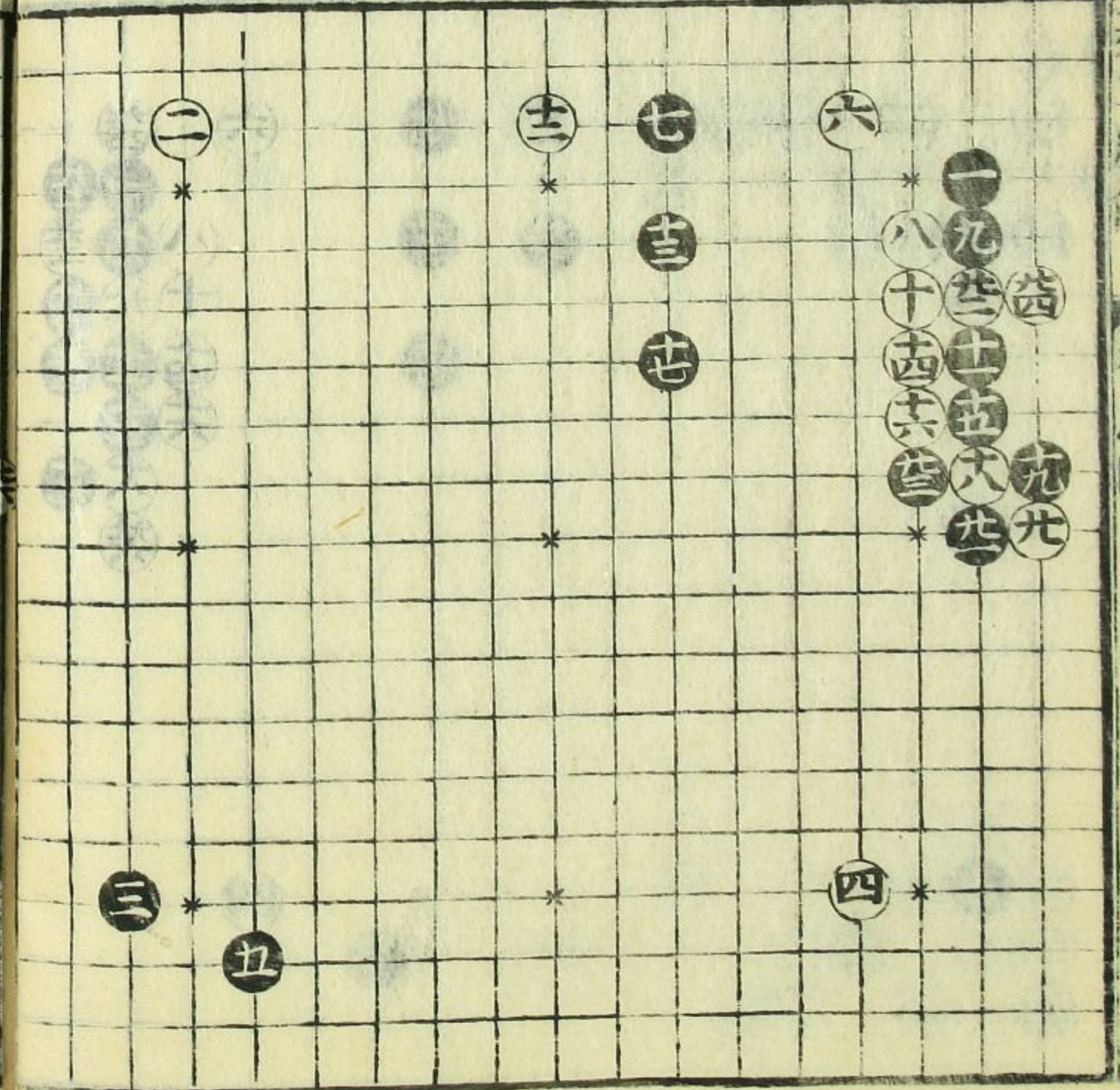
才九し十一

四十一と

白二十八のし黒
十九の柄よはく
わくのこやく成
ては黒先いさほひ
大きかり

才八つ組の事

棋譜 卷之四



棋譜 卷之四

才拾一

五十四と

黒五十一の白
四十四の黒
新のこころなりてハ
黒のこころなりてハ
三十四の白
切
少くきなり
黒二十
九の白
十の黒
勢と流し
前書き
のあり

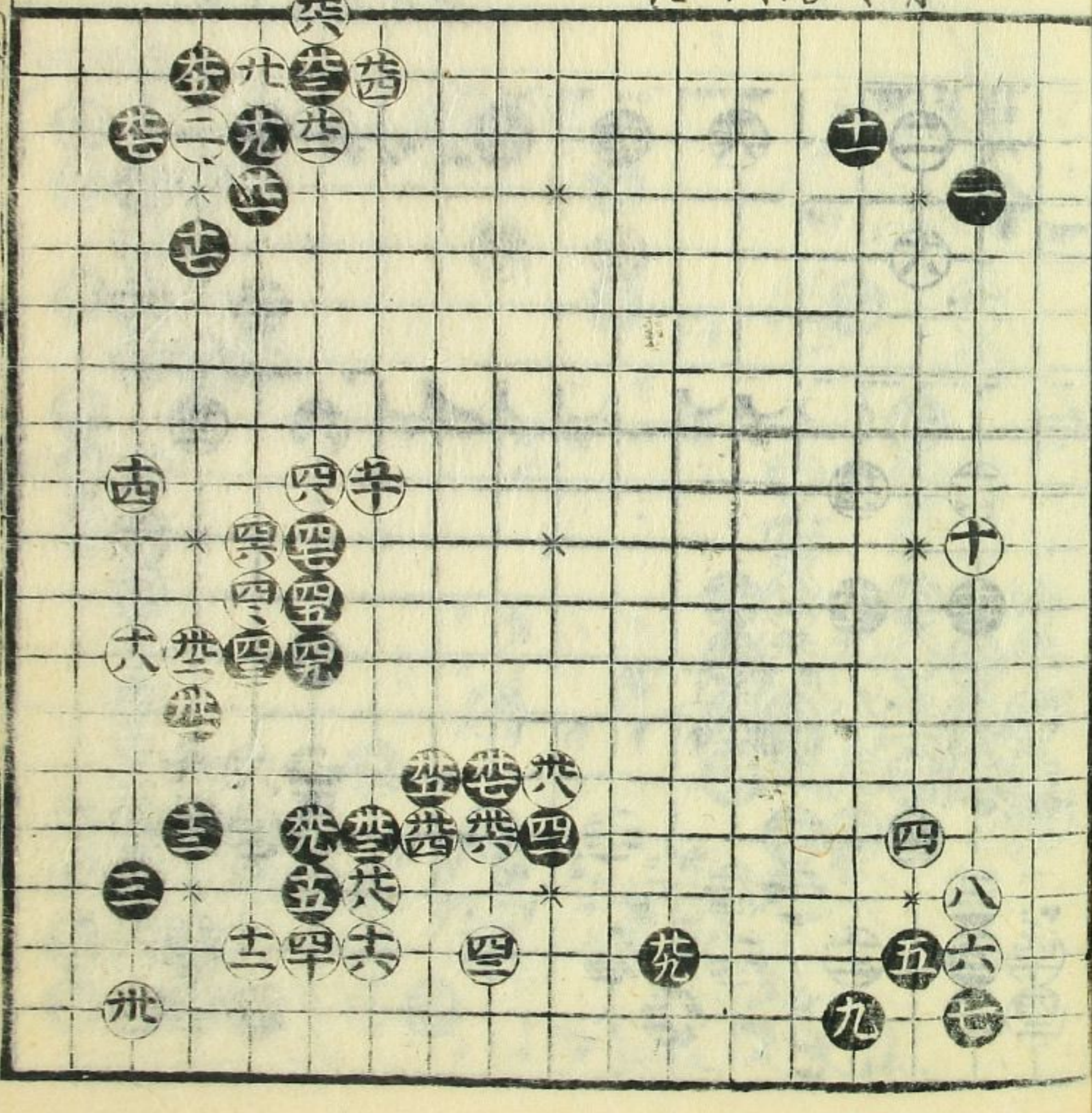
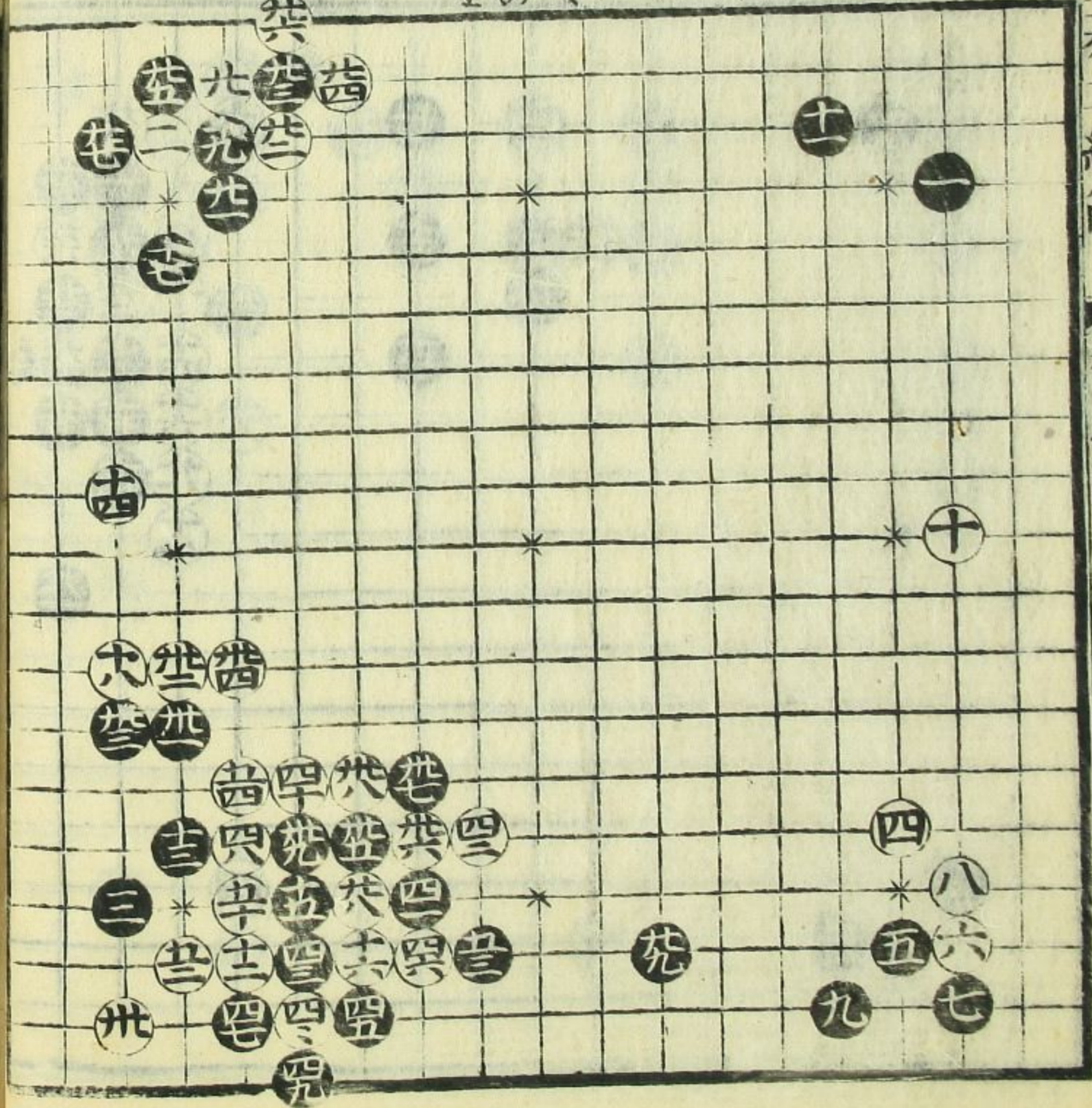
四の
五一ツク
共

才拾二

五十一と

白十八の黒
押
たれと新のま
ぬりて先
勢ハ
怪
大なる
なり
の所
なり
考へ
なり

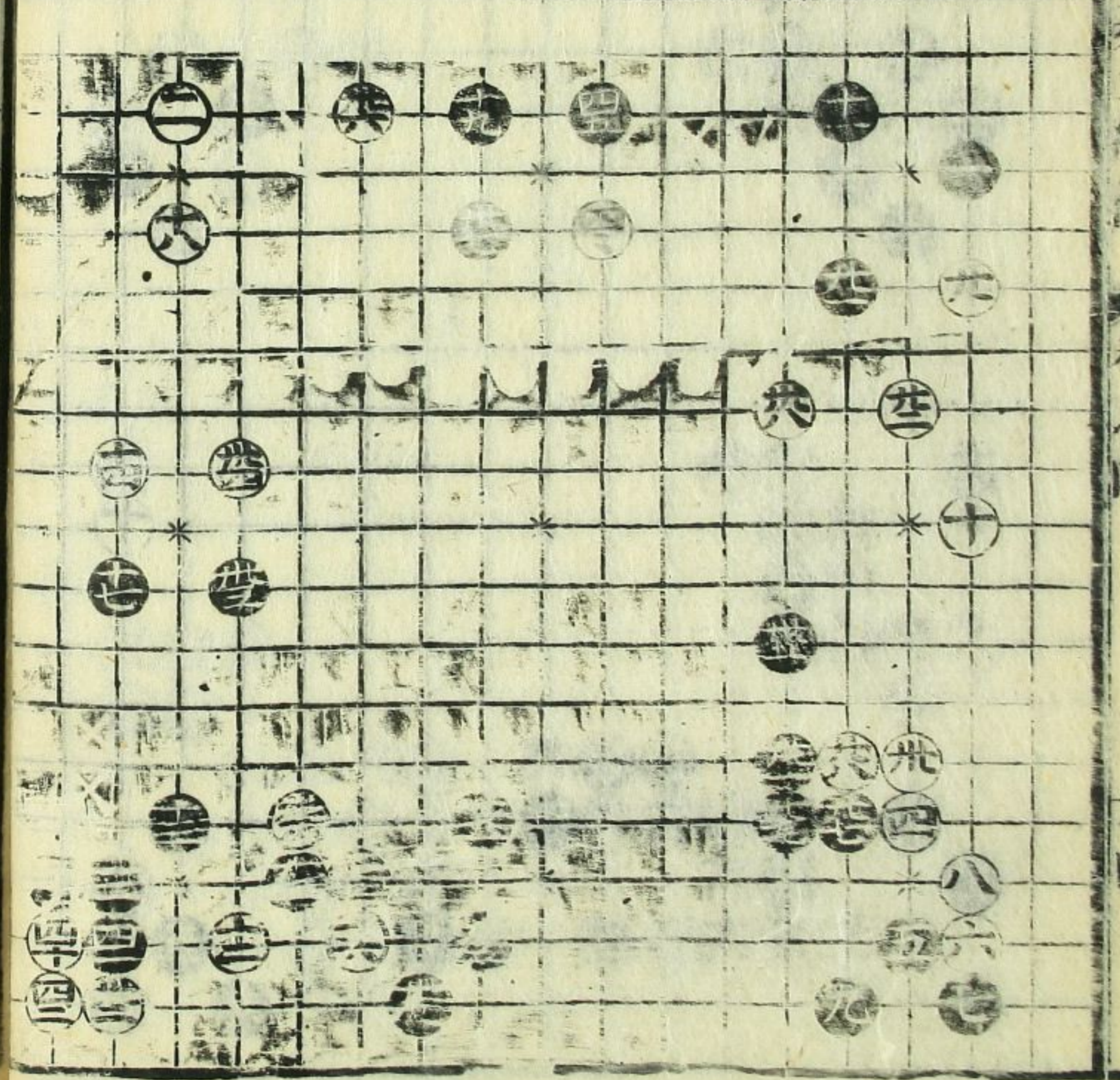
碁正統
卷之四



九拾二

四十五

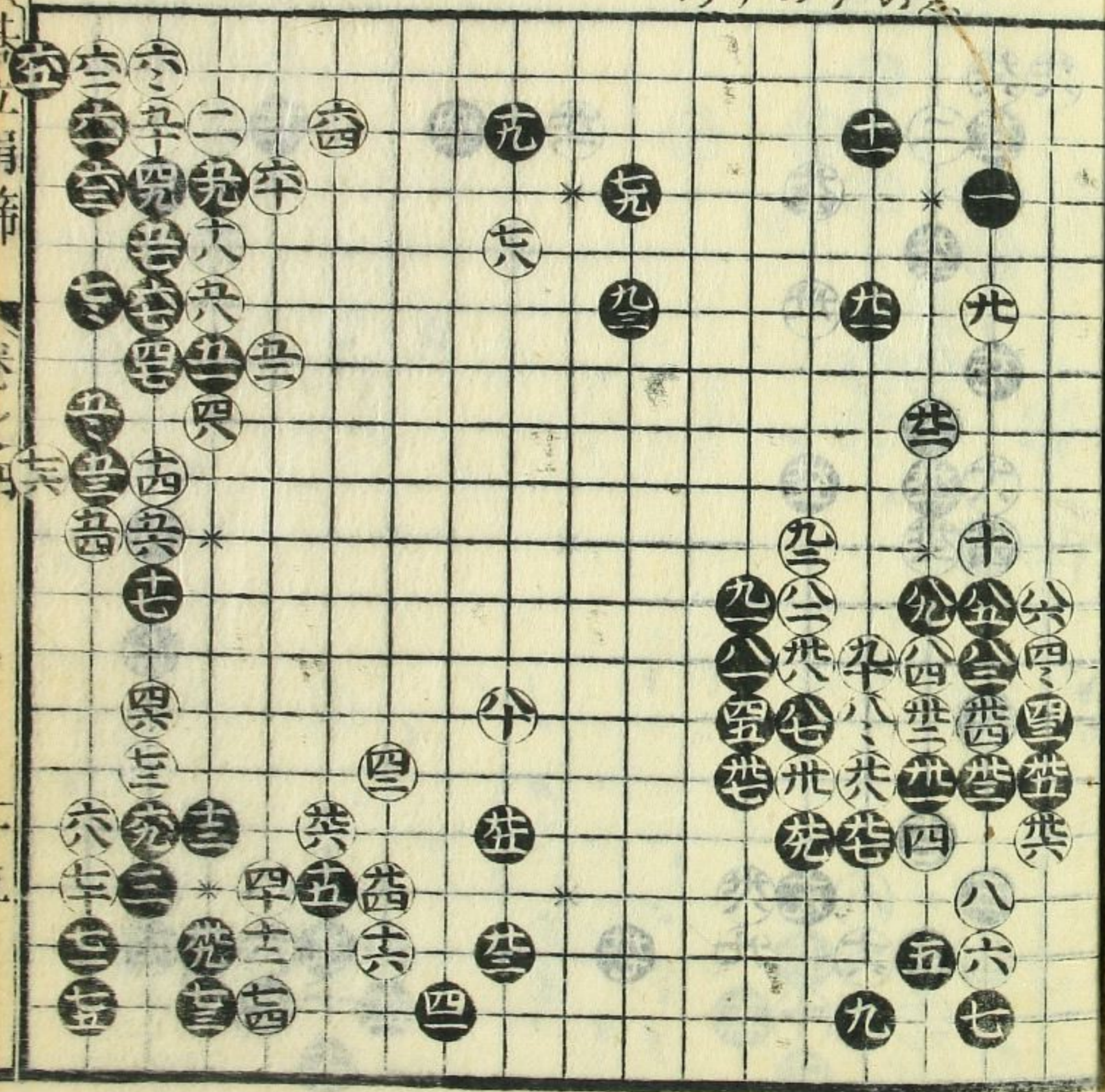
先手はひねり... 四十五の... 桂に... 手はひねり... 四十五の... 桂に... 手はひねり... 四十五の... 桂に...



九拾三

九十三

先手はひねり... 九十三の... 桂に... 手はひねり... 九十三の... 桂に... 手はひねり... 九十三の... 桂に...



七

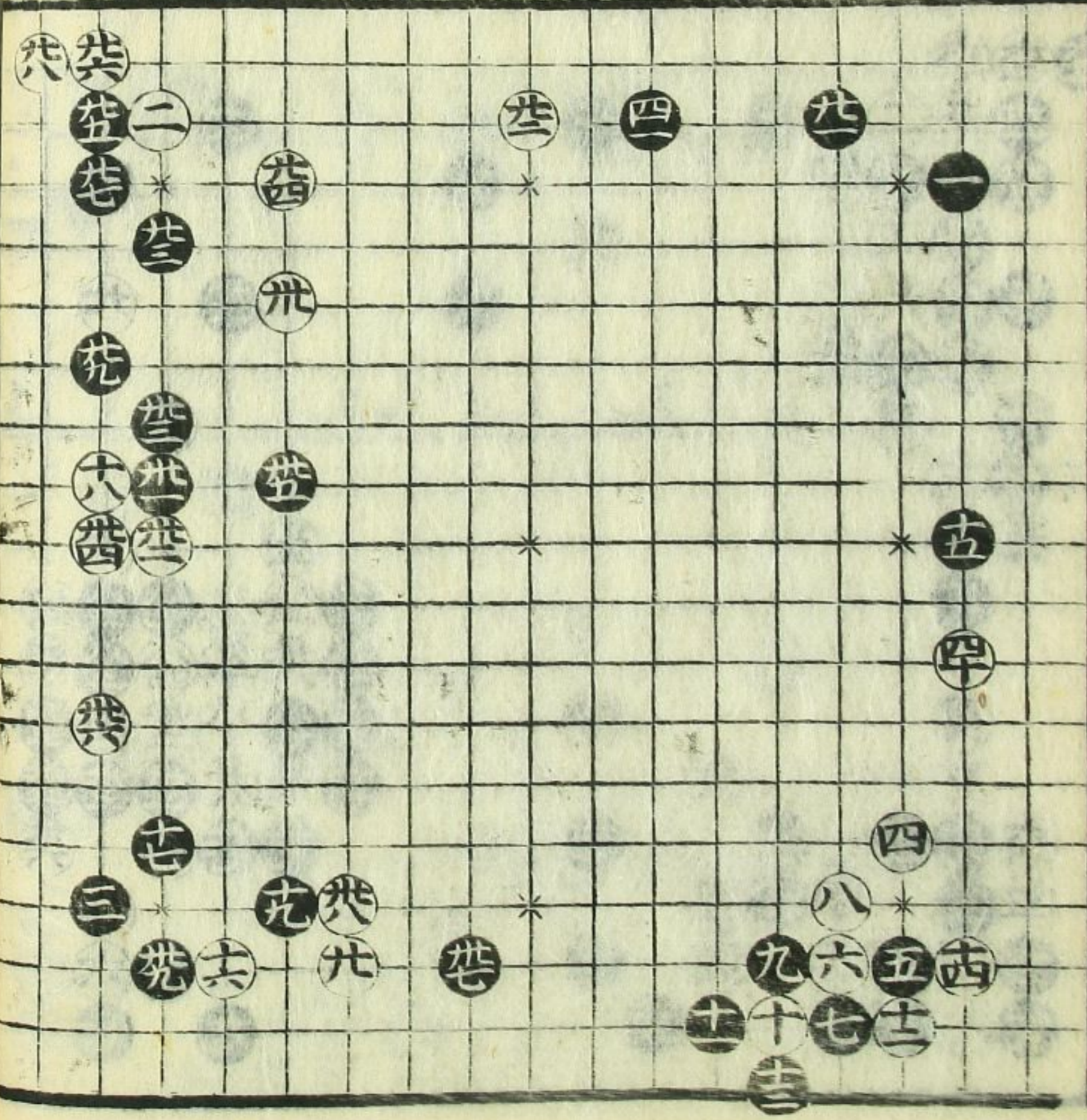
六

五

才拾五

四十一

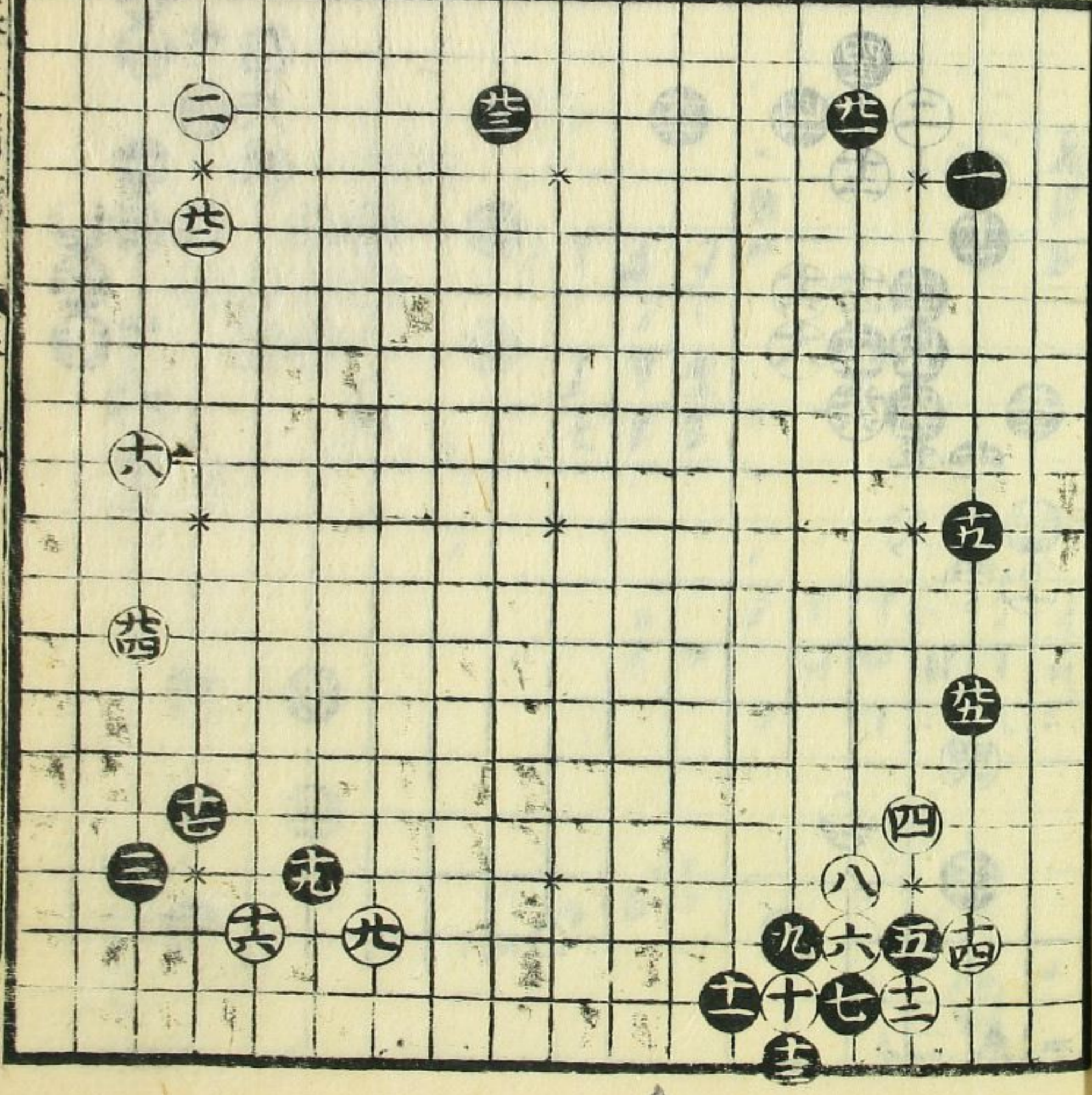
此石五つてのこゝ
先の勢ひはうら
む比形より深あふ
うんと取大ま也



才拾六

二十五

新のふくむせ
り成りて先の
勢ひよりあま

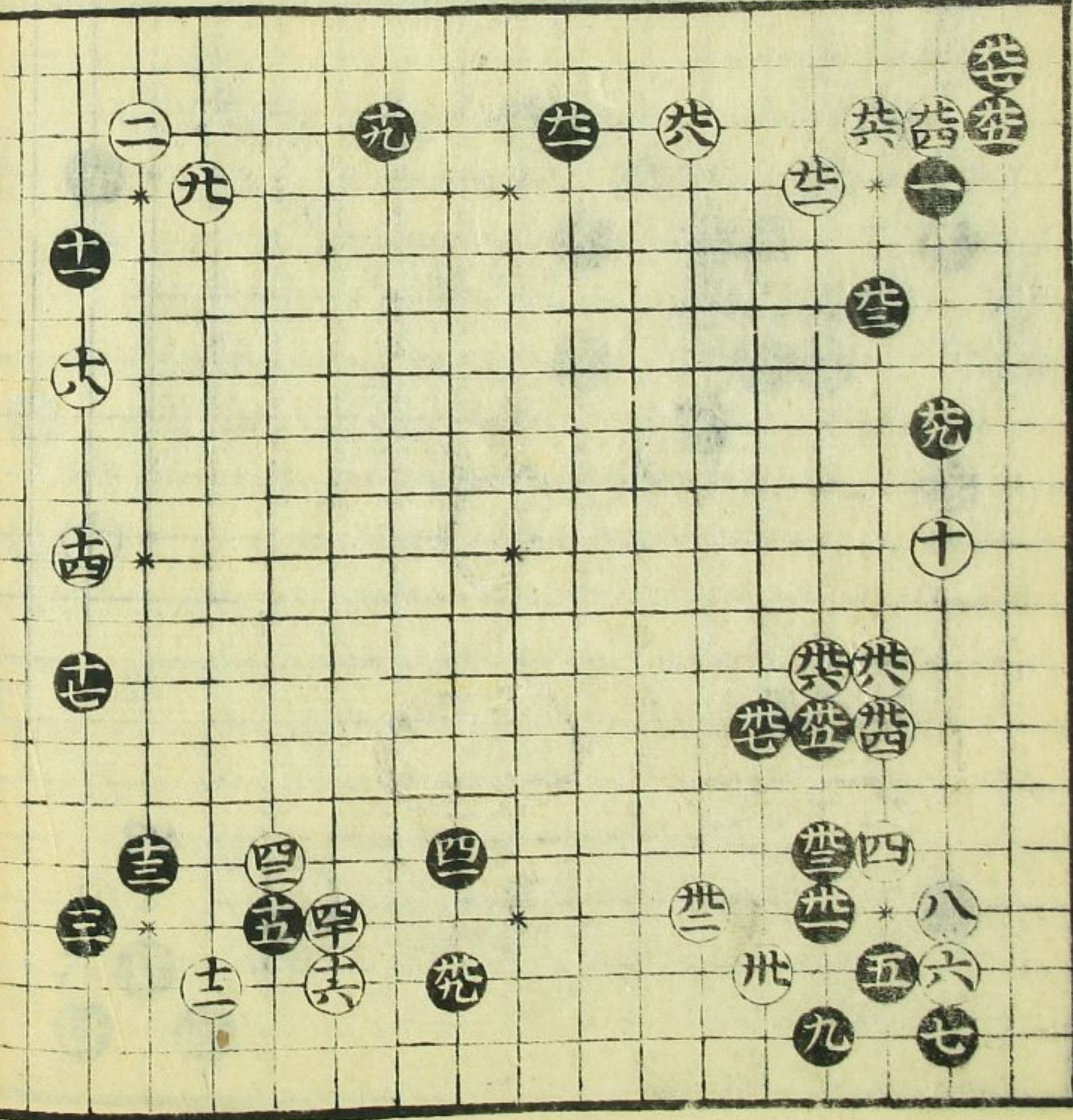


碁上糸倉
徳之
五

才拾九

四十二まで

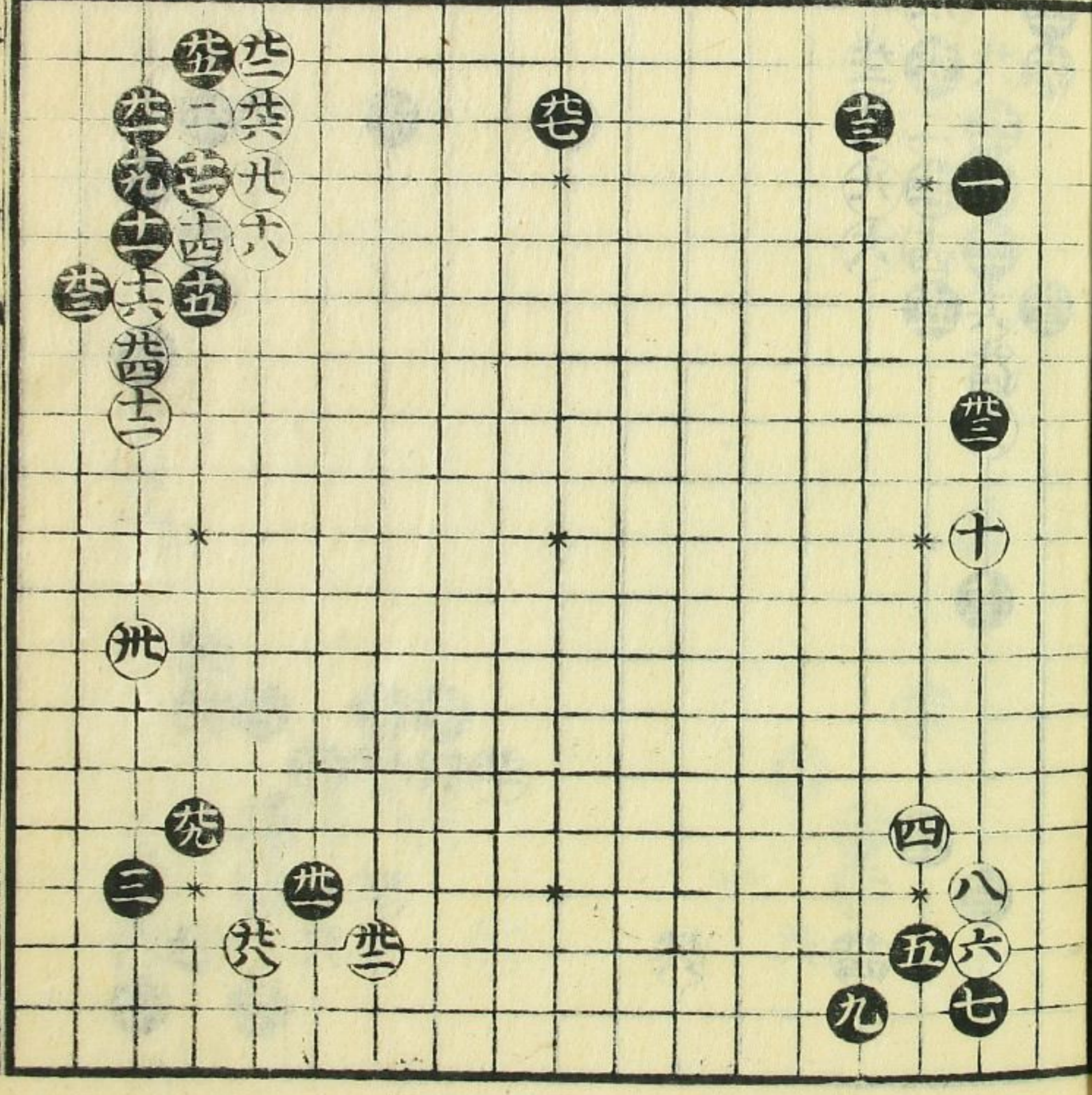
かくのまやしく白と
 黒にはほよおとす
 負をゆくすり事
 あり其神を意し
 て先いれおひを取
 るむなり



才拾十

三十三と

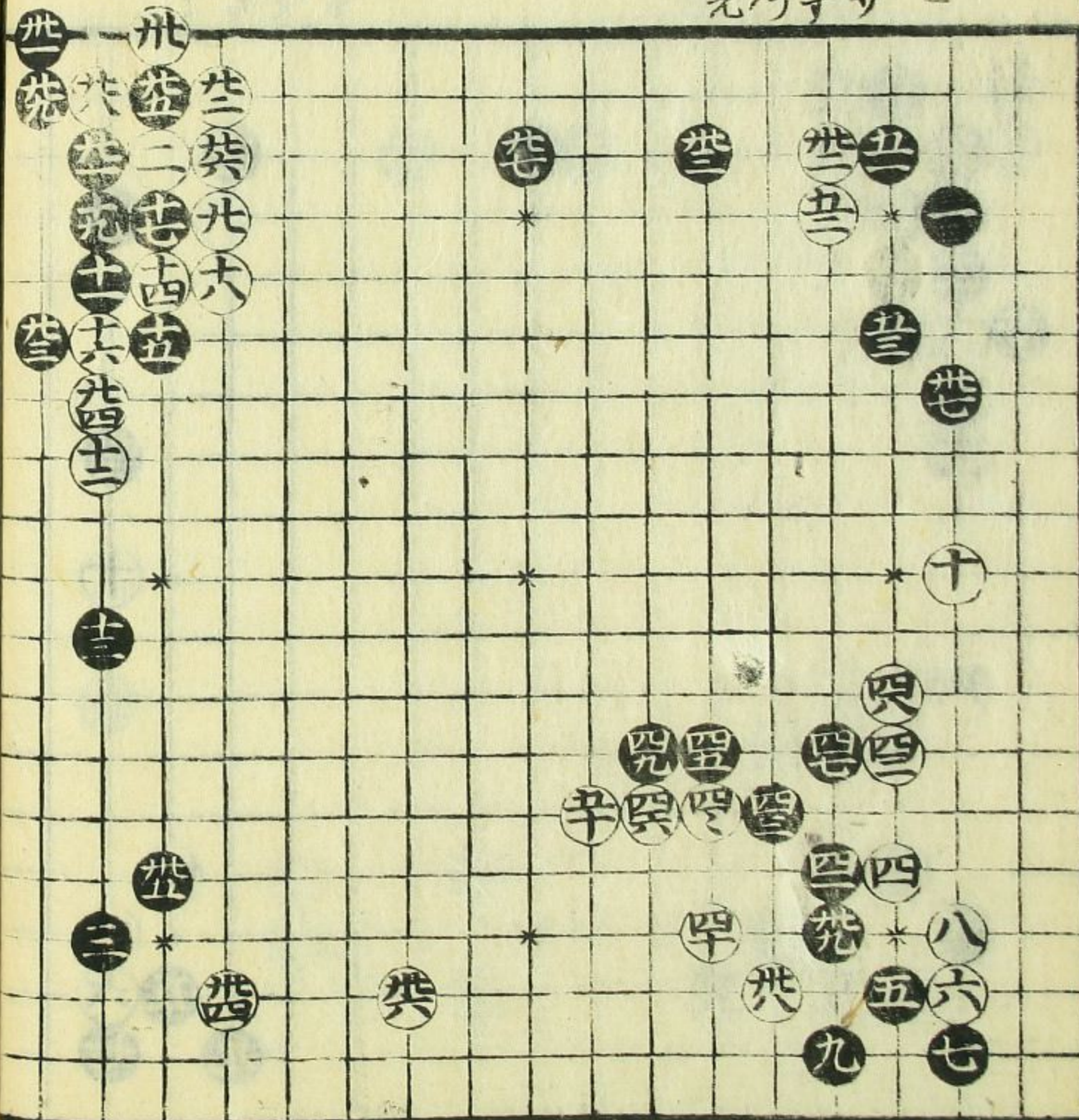
新のこくく十二と
 白ふ披くお時を
 黒よりあつめられ
 妙なりあつても
 先勢ひ狂かり



才拾十一

五十二と

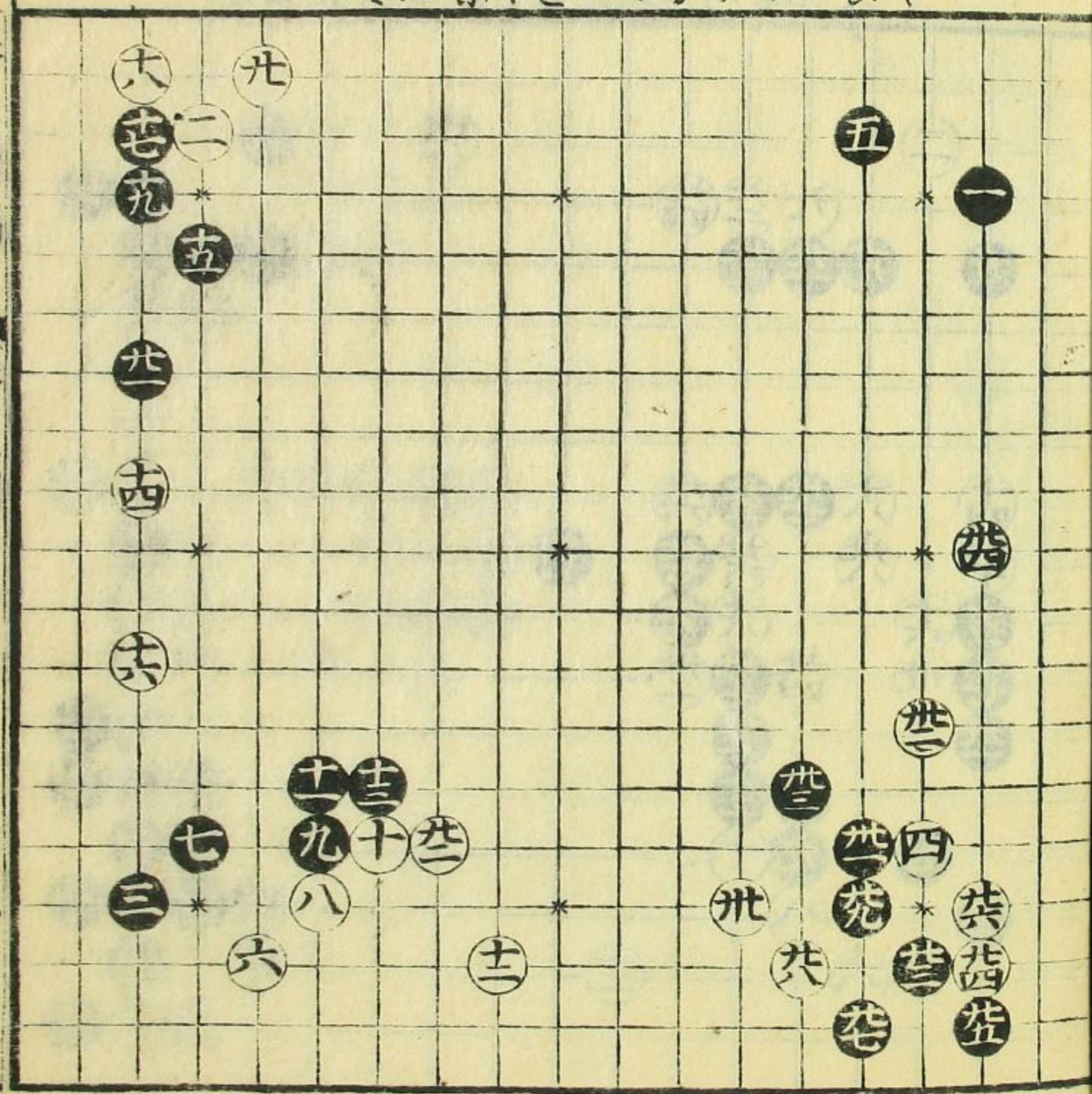
新のこく黒打
内ハ白大位よ打す
るもめかりしめり
ともはやくして先
勢ハいさくも也



才拾十二

二十四と

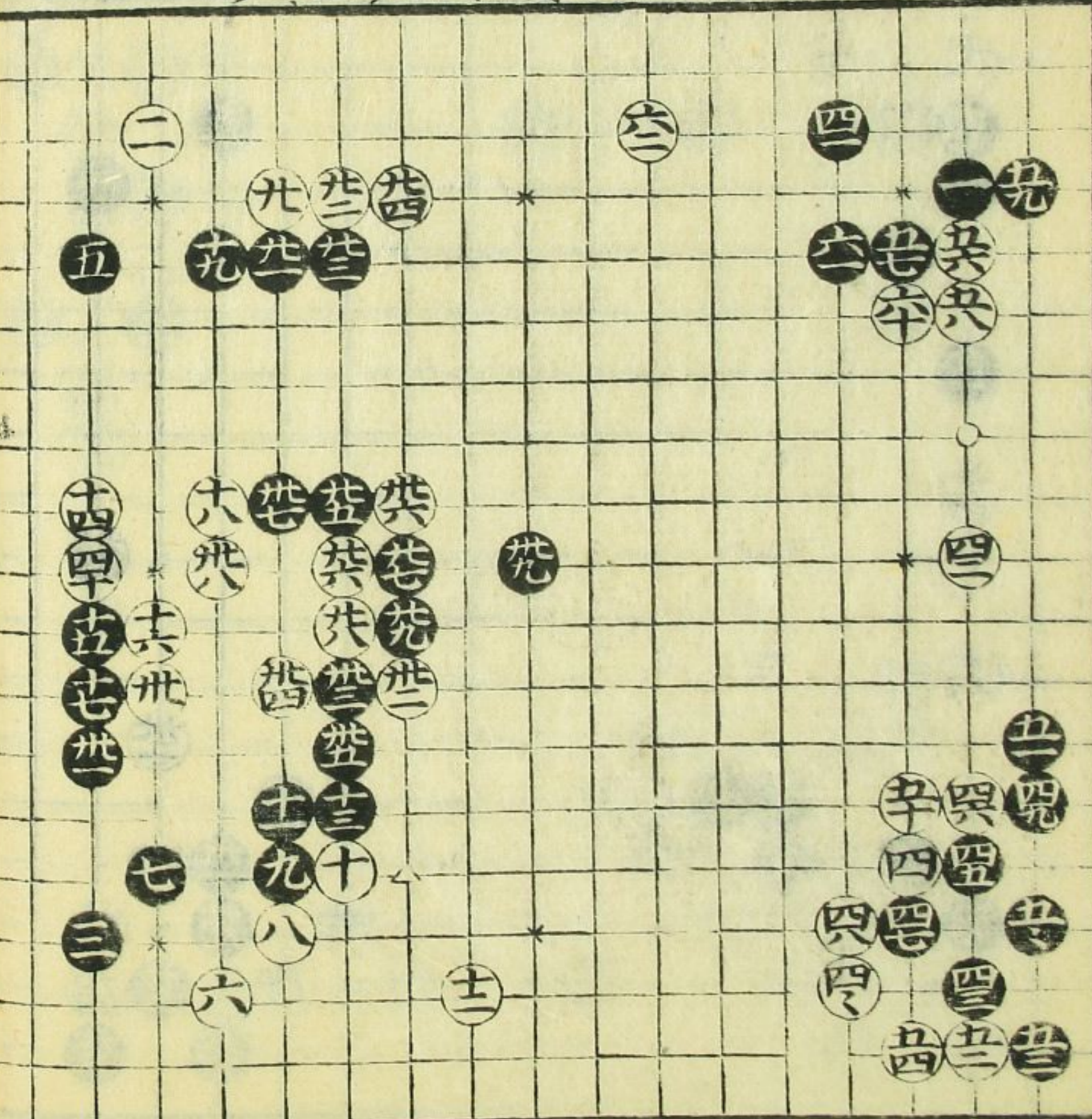
黒十五のこ早く
拂れハ白廿二との
角(桂)は花ハ黒
ワヤリ黒十七の
こよ(宗)する事
宜しければ黒は
一して河(き)は
黒十七と打之は
るも黒五と打之
すハ白三と打
さく打之は黒
石立よ更て打
ぬ



才拾、十三

六十二と

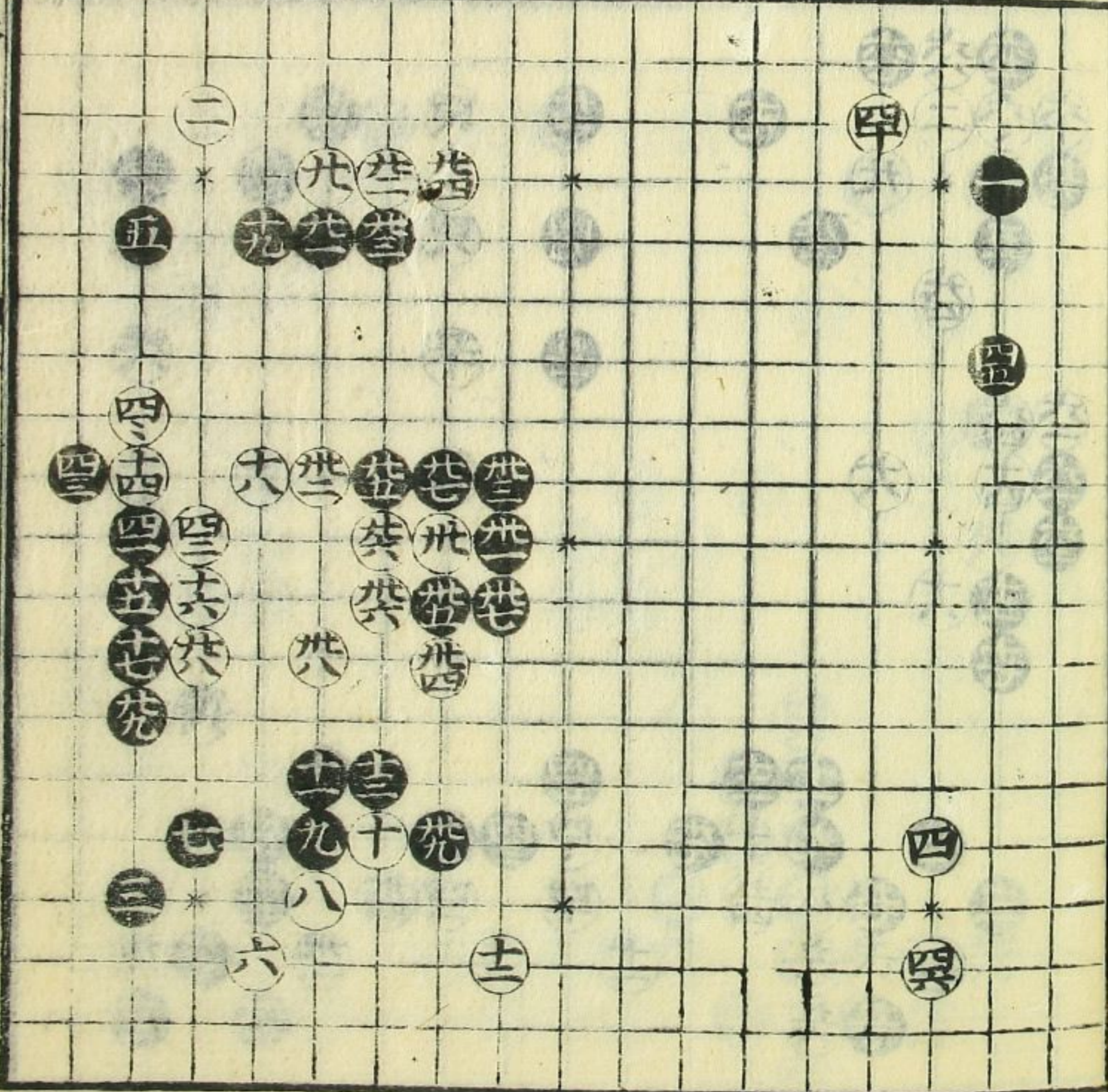
此の先手は白は
白の六の切有
面から黒は五
から成りてせむ
る内からこのく
がる白の先手
て成るは六好
成るは五なり
十五の〇に
打は白の五の取
打は黒の取
かすは係一
て成るは五
の〇から
成るは五なり
成るは五なり



才拾、十四

四十六と

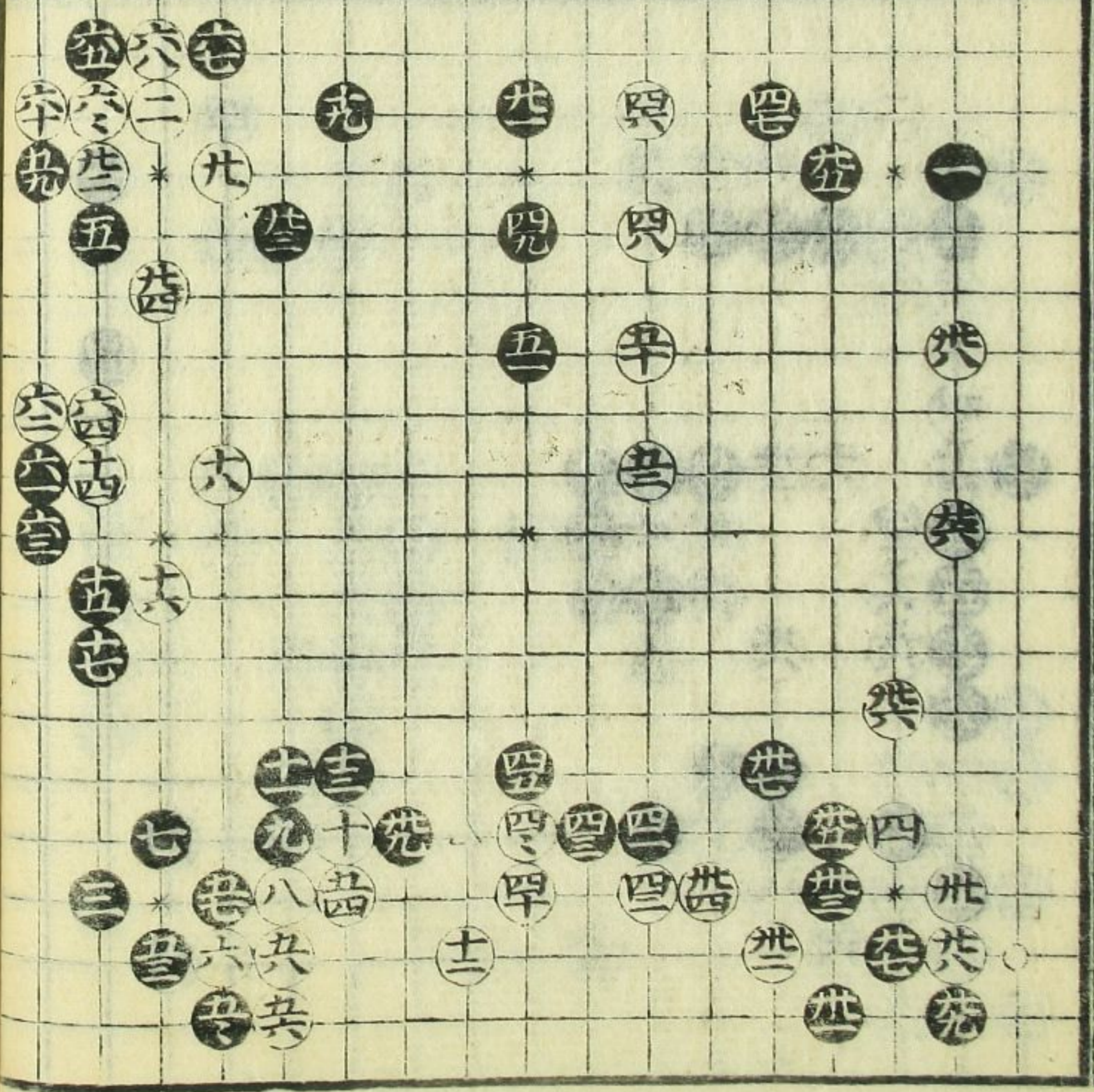
此の先手は白は
先手は好む
身は黒は
あるは五の取
九の取は十一の押
成り去るは位を
十一の取は
十九の取は
揚めて六の利
と成りては黒
扶成るは五なり



才拾之十五

六十八まで

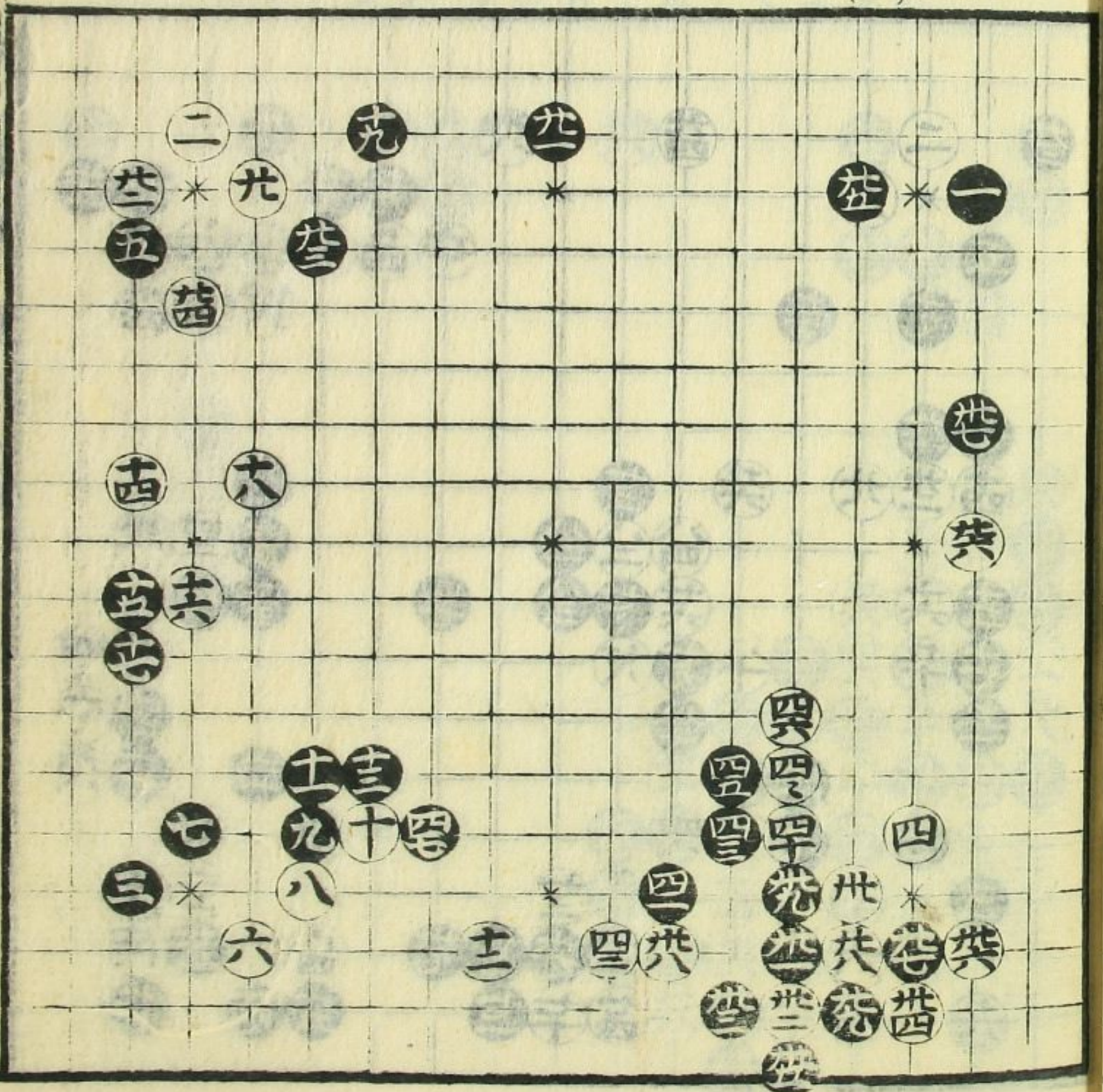
此の如く打つて
黒白は九を
兼て十一三と初め
の如く押さるる石を
白の如く打つて取
らねば八黒十から
ゆらぐ併先並に
打つても石を
ゆらぐは傳
味基にても二十七の
ゆらぐは白の
ゆらぐは黒の
ゆらぐは黒の
ゆらぐは黒の



才拾之十六

四十七まで

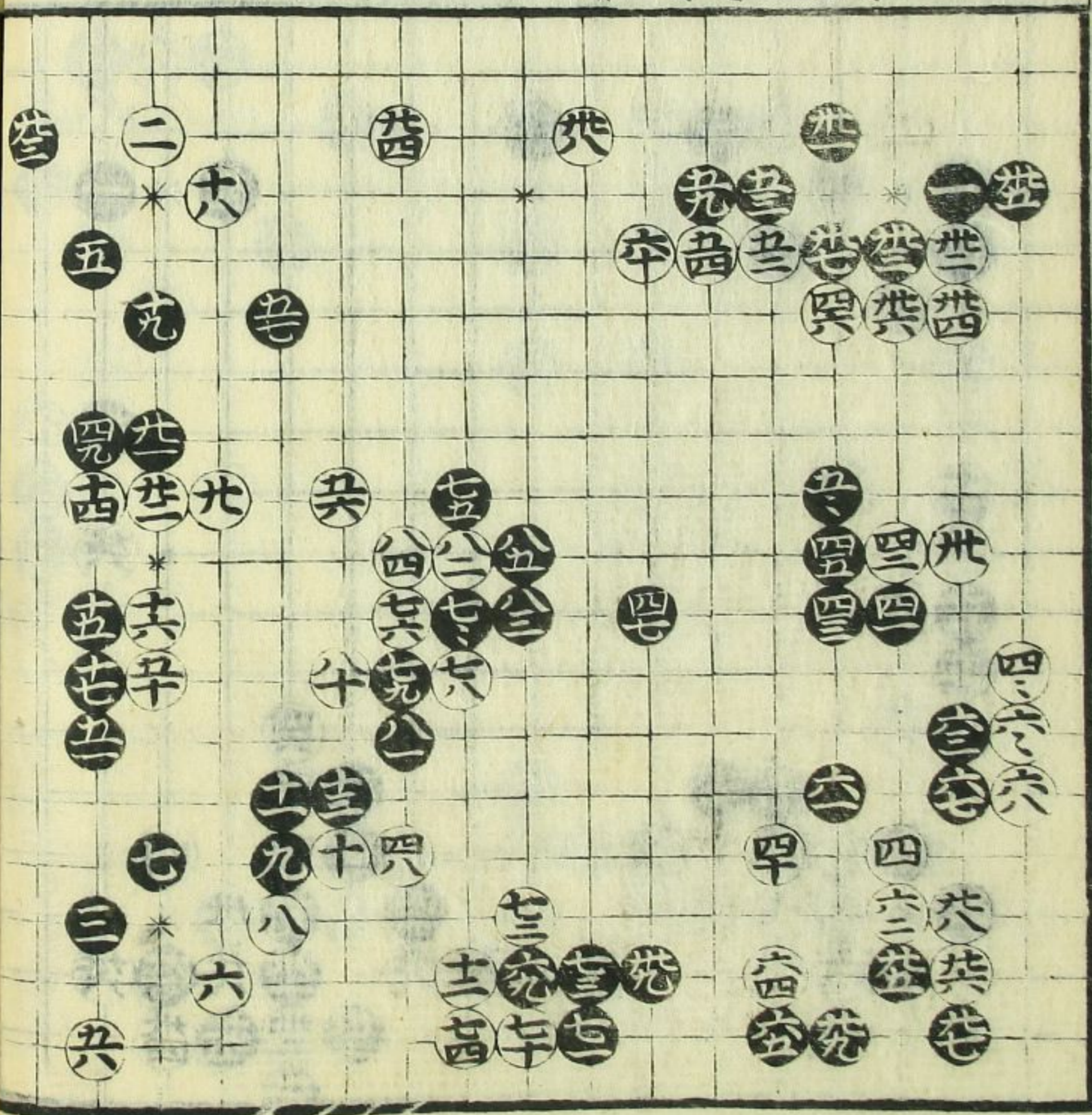
斯の如く打つて
黒の如く打つて
て、黒の如く打つて
ぬ



才拾七

八十五

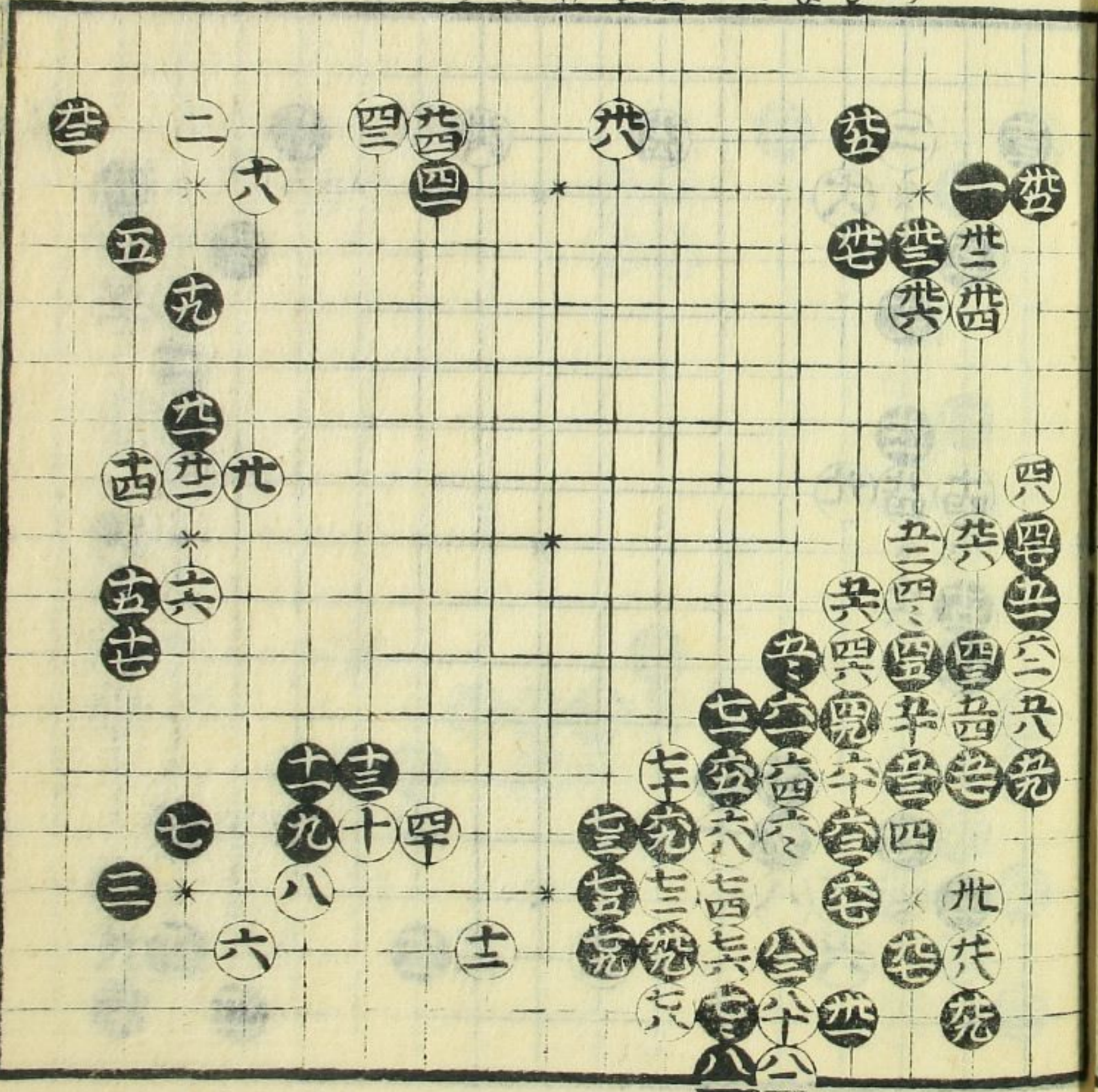
先勢以恒地進き
其多かり平場四と
とむせしむるは
我身より我らと
法一にて自他と
白の知くよめ
打中かんく知く



才拾八

八十二

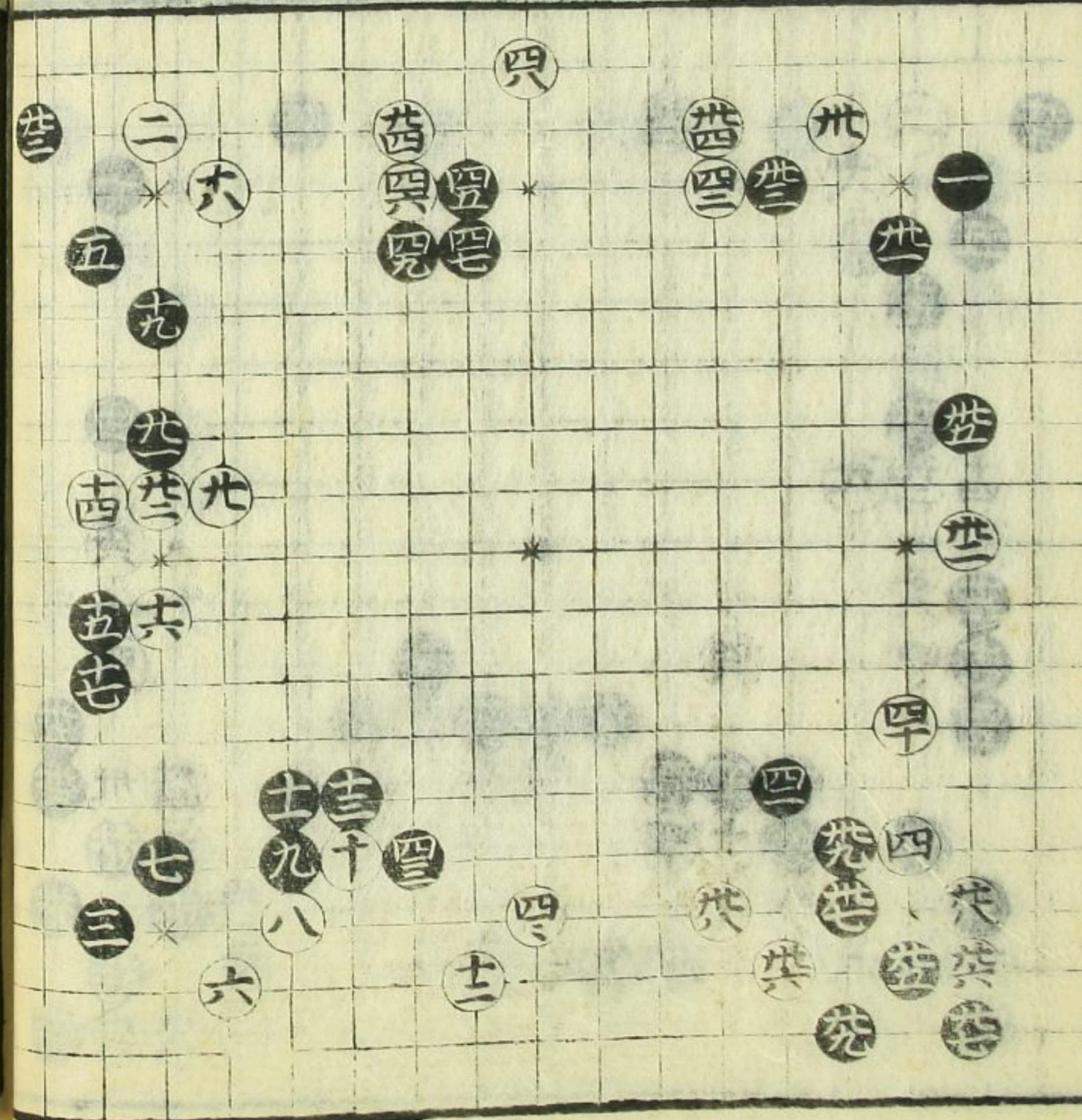
此の五里四十二の
打中の四十三の
を恐れ征のをよ
白北四の流さす
四十一と打なり
去の場日流さ
征のをなりと
打所の四十三
をわして用か
不又待るか打
す一表まる
見合は



才拾(廿一)

四十九と

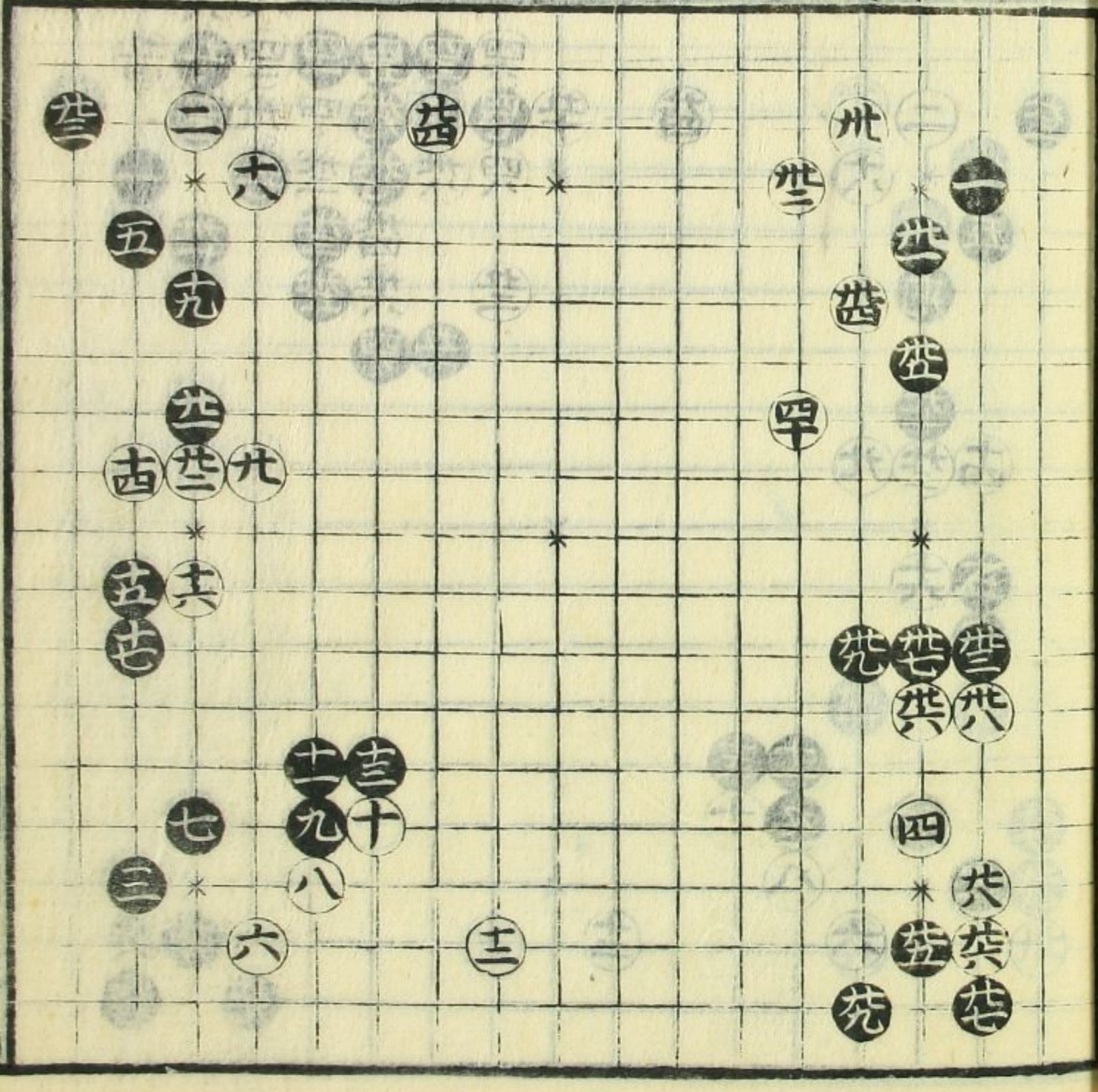
新のまゝく机碁
よりぬけても碁の
基より黒かゝる
先づれりひねこ



才拾(廿二)

四十と

白より新のこゝく
順して先おつせて
そねりし

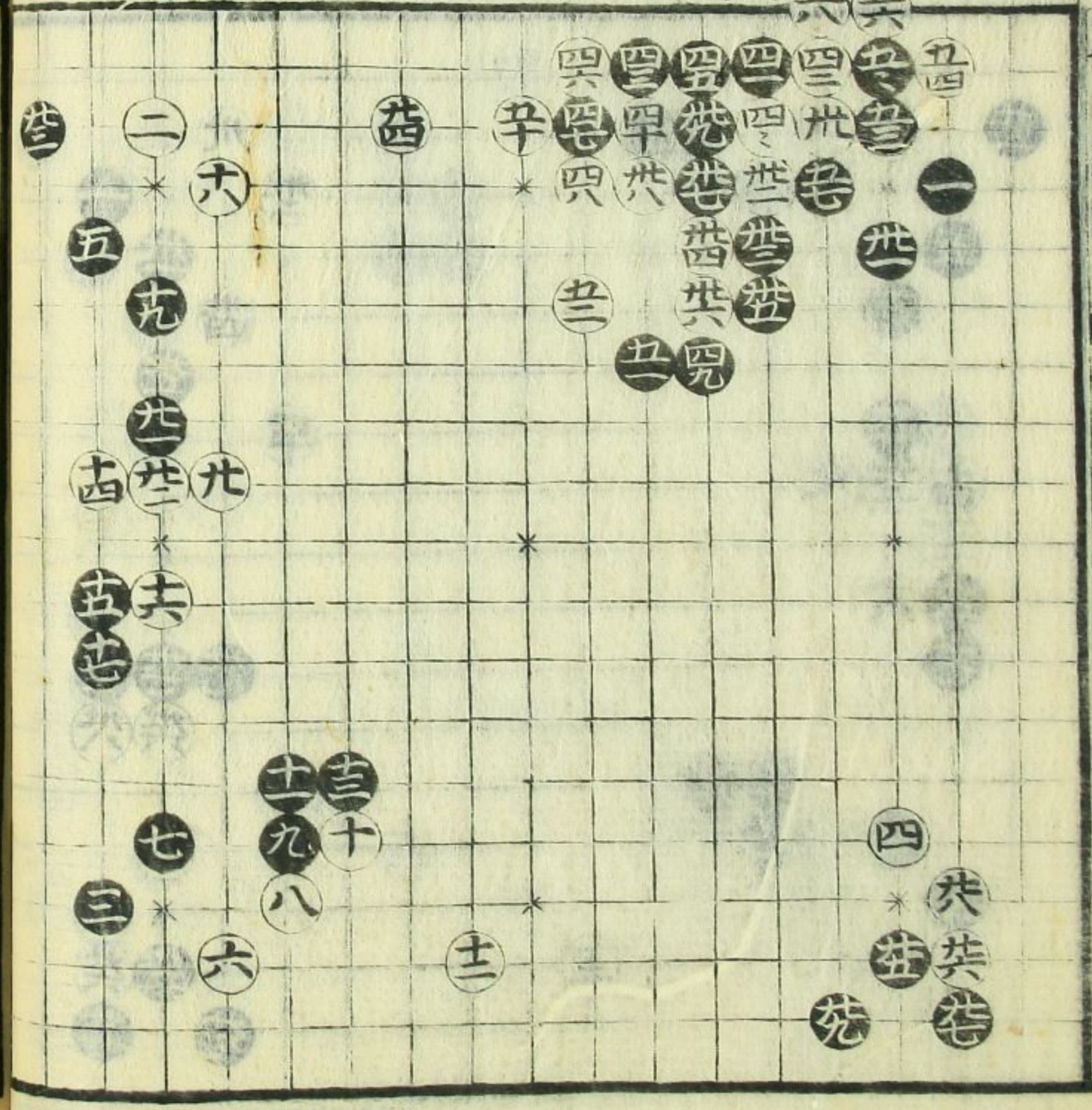


碁立編録 卷之四 四十九

才拾し廿三

五十八まで

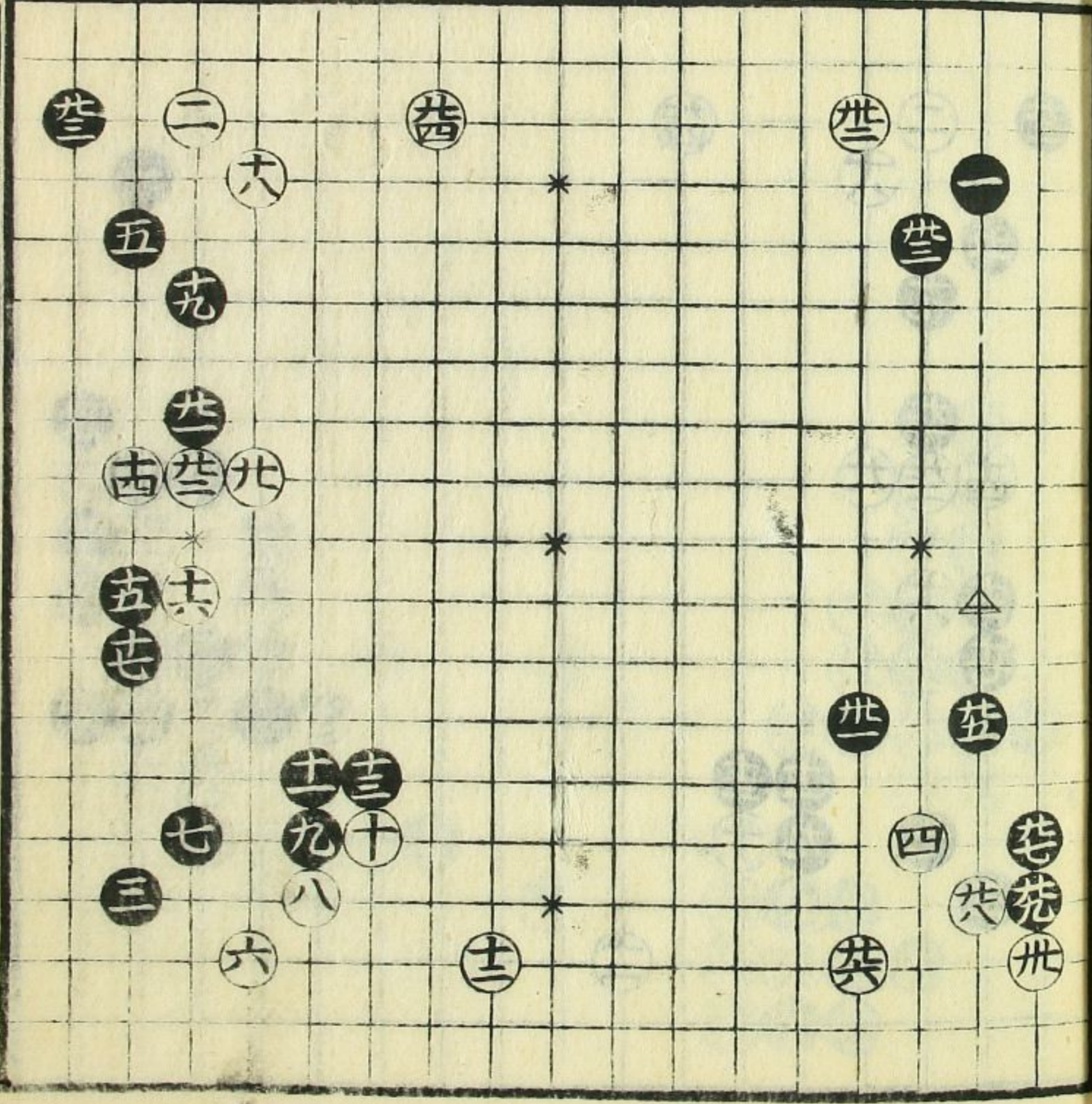
黒の駒のふくく
折白の駒も有
て、白の駒は陽の
黒の駒の切して
の位とあるが有
るも此棋は平
場、白は、白の
駒の黒の駒の
あききなり



才拾し廿四

二十三まで

黒廿五の時白廿六
を地より折る所き
折る黒廿五のいき
はひを折るする
事ゆゑとも白の
△下二間挟むとれ
傍るも又折れて
多危し黒廿五を
一番と解く見合
る



五
五
五
五
五
五
五
五
五
五

五
五
五
五
五
五
五
五
五
五

才拾二廿五

四十四と

初のこゝろなり
てハ黒は先勢
ひきかへ白ハ
四十二のふと四十三
の黒は先指△印
ハ初めもゆり一
ハふよみて見合
すべし

才拾二廿六

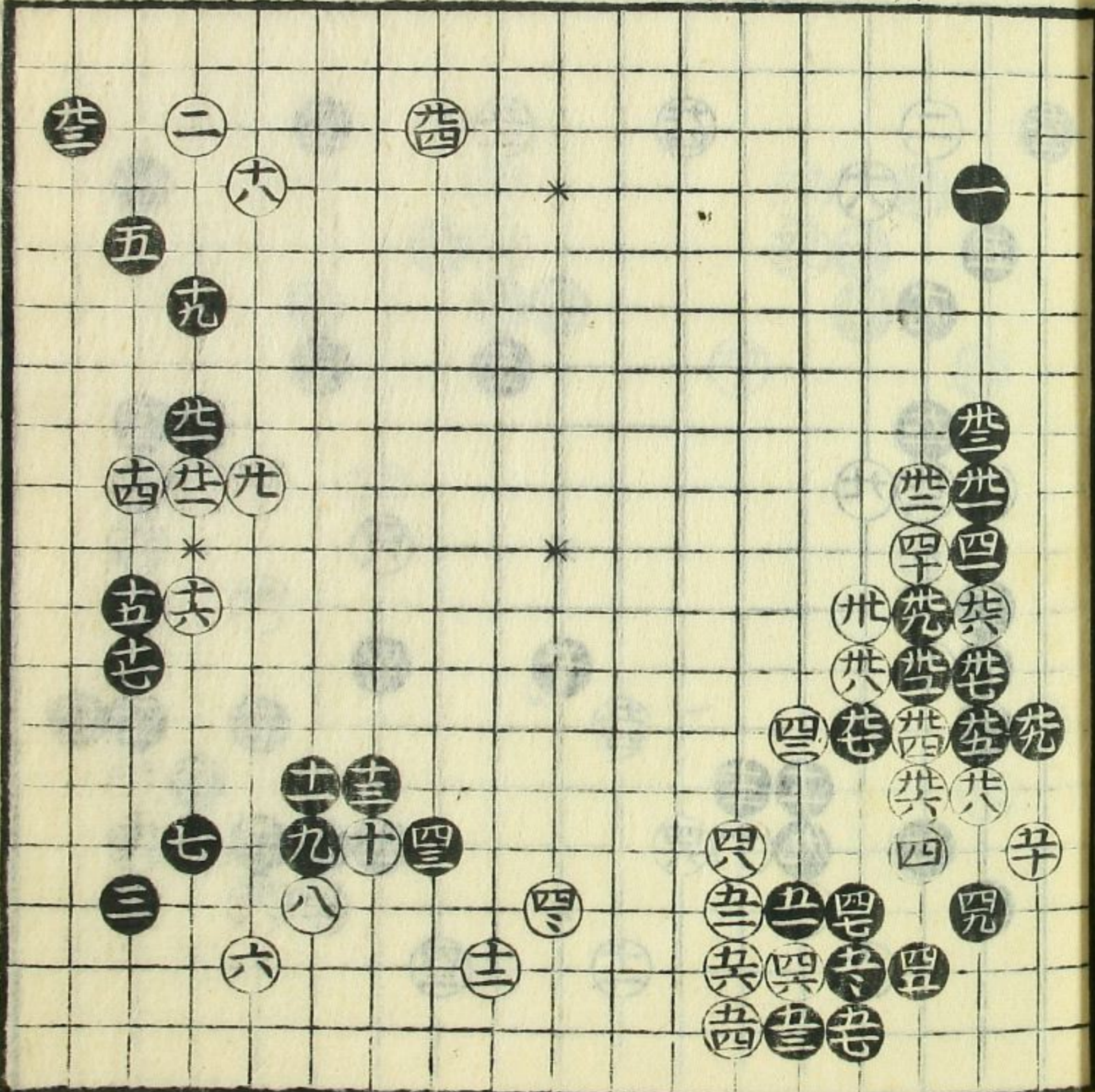
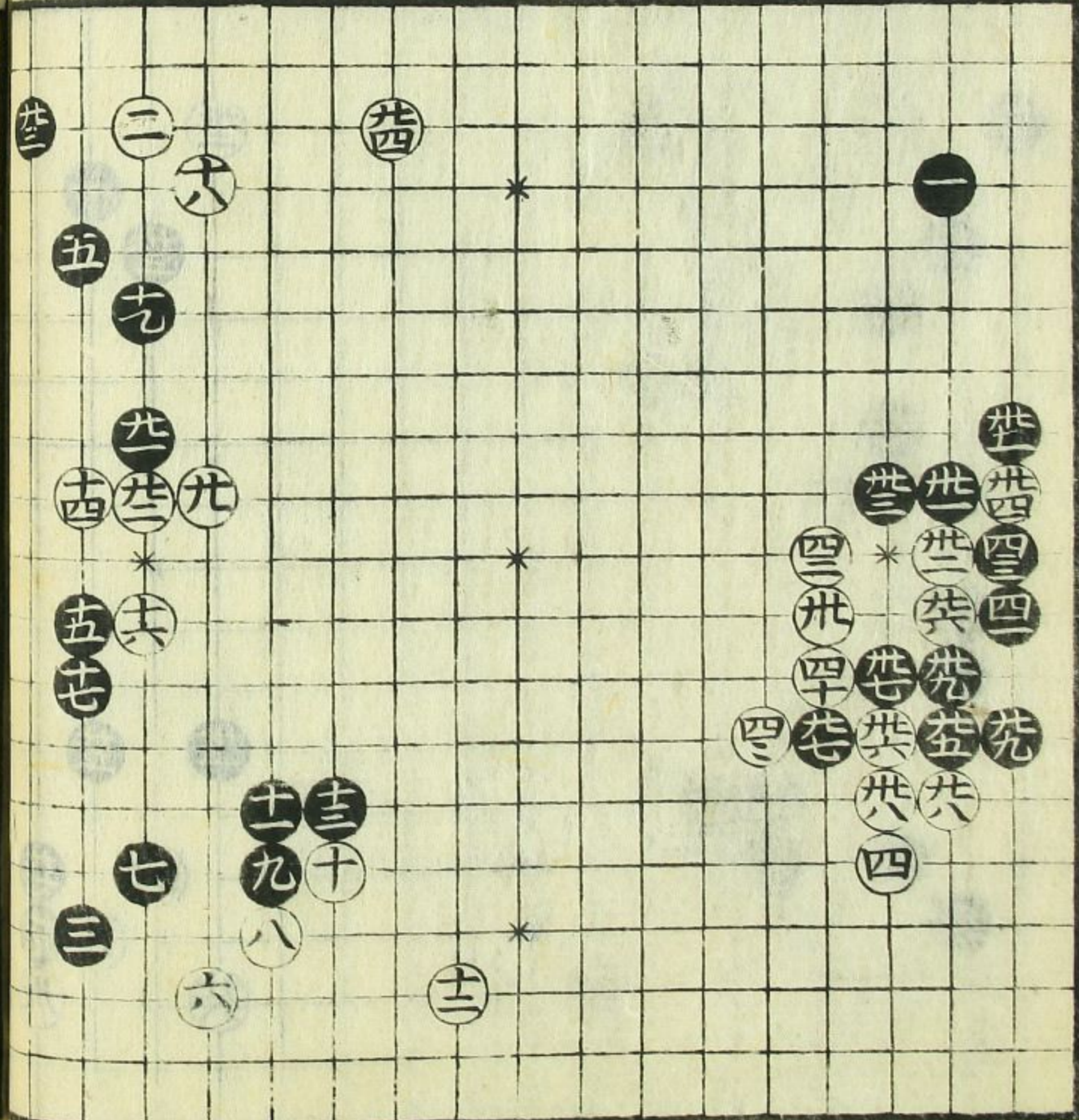
五十七まで

新のふとくぬりて
黒四十二のふ先よ
がるは黒四十九は
赤史より黒先勢
ひきかへ四十九分
に赤史よりなり

本編上級部

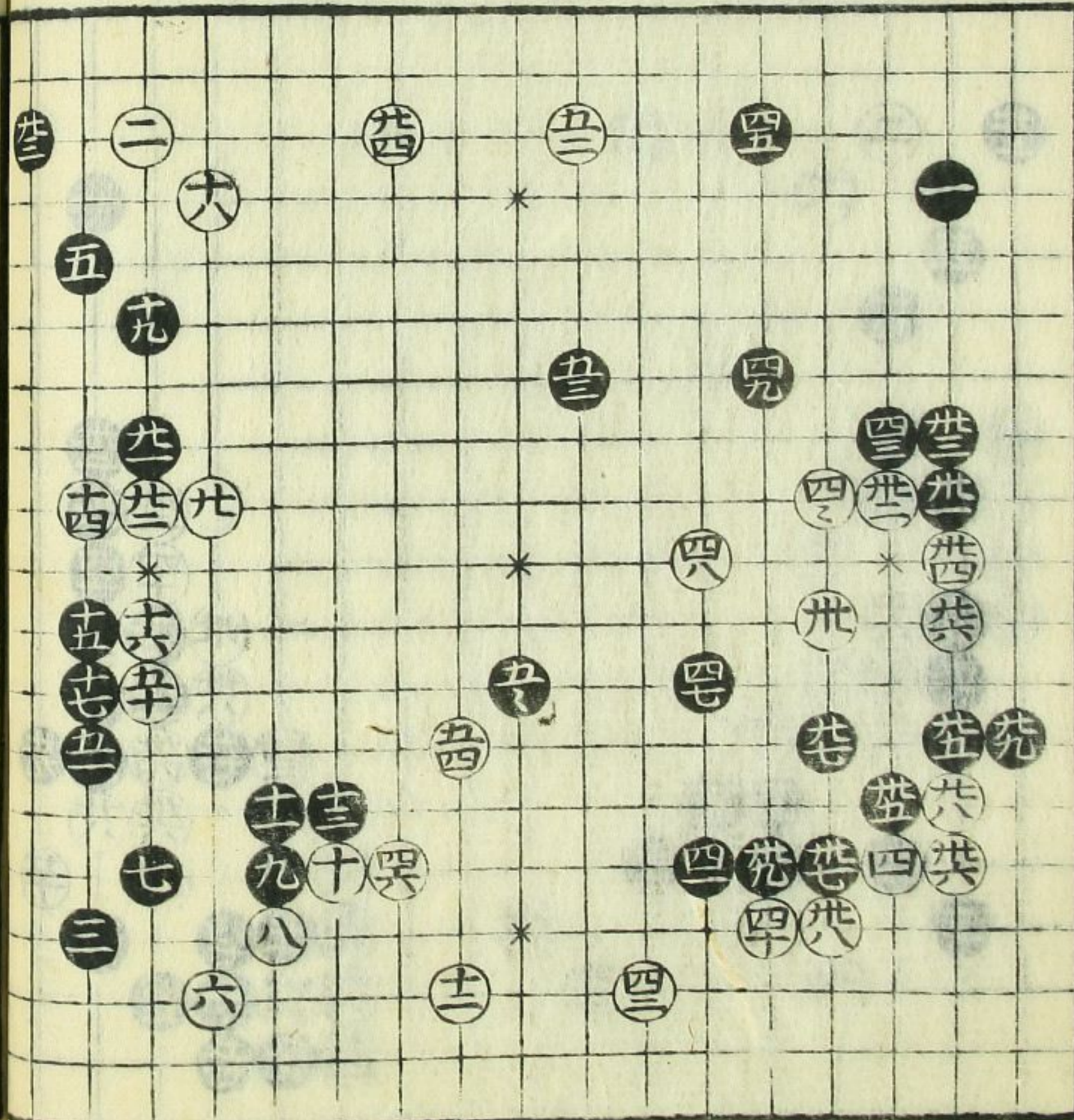
卷之四

七十五



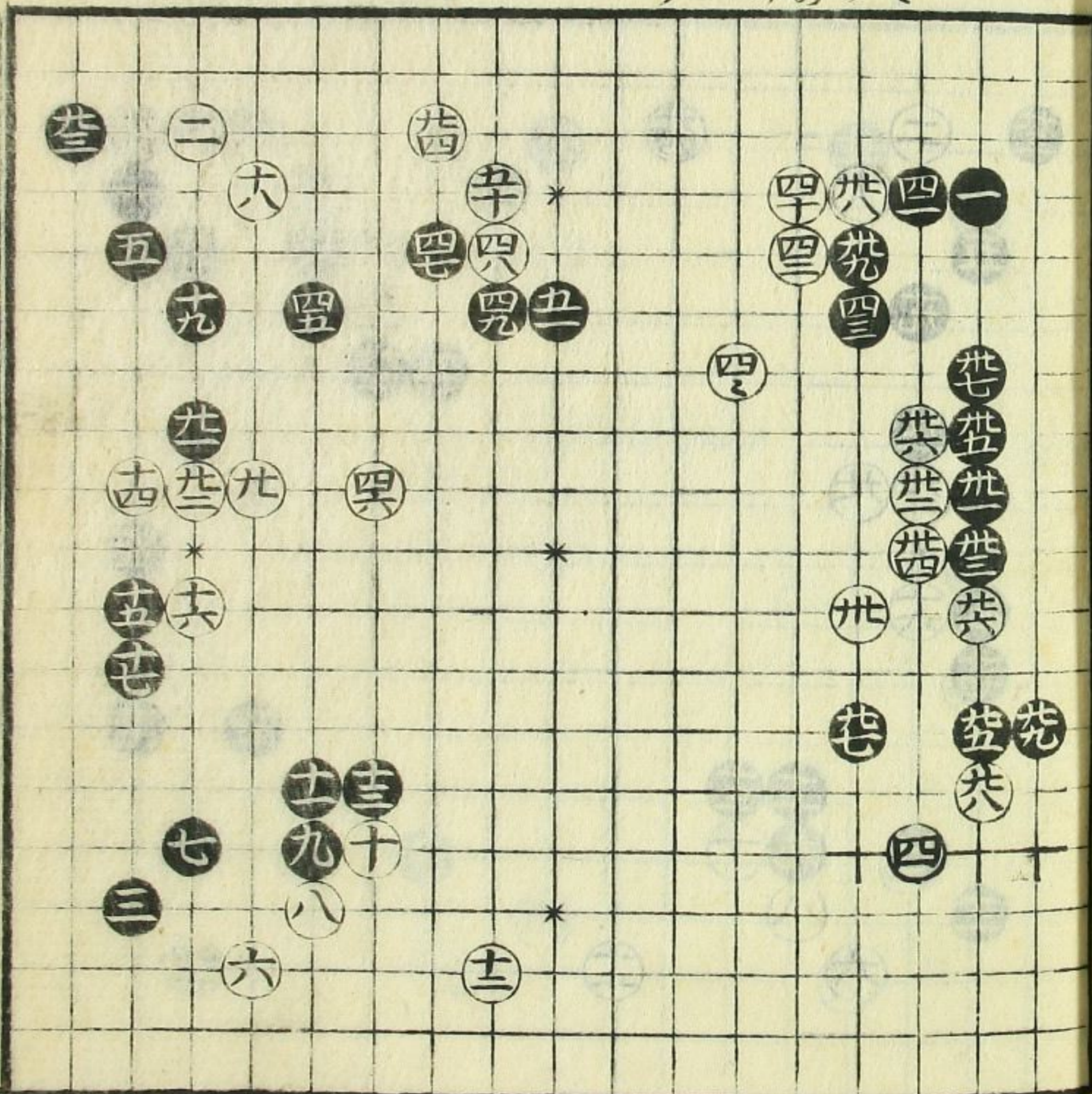
碁正新編 卷之四 四六

才拾七廿七
五十五と
このこく打り
黑白ともに本方
なり此の對格な
れども黒厚し



才拾七廿八

五十一まで
新のこく打り
も先の勢ひあり
一處よりして此の
こく解も有る一係
ゆきこく解ゆ
るまゝて打へる
事



碁正新編 卷之四 四六

中拾九

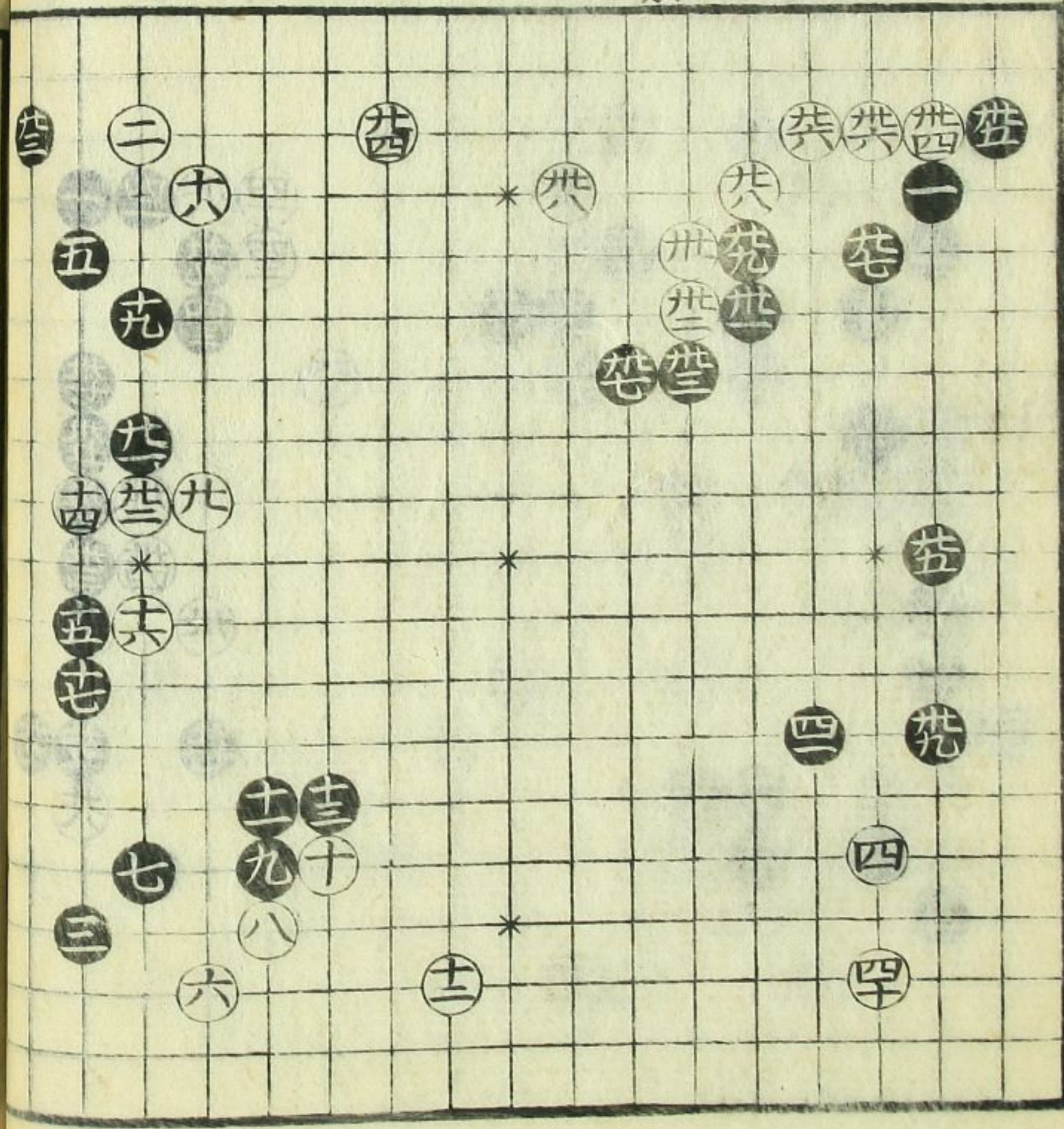
四十一まで

茶のゆく黒廿五
と白四下に撒り
赤△印をまき
ても少くはる
ゆめのことゝ黒
廿五と打之口借

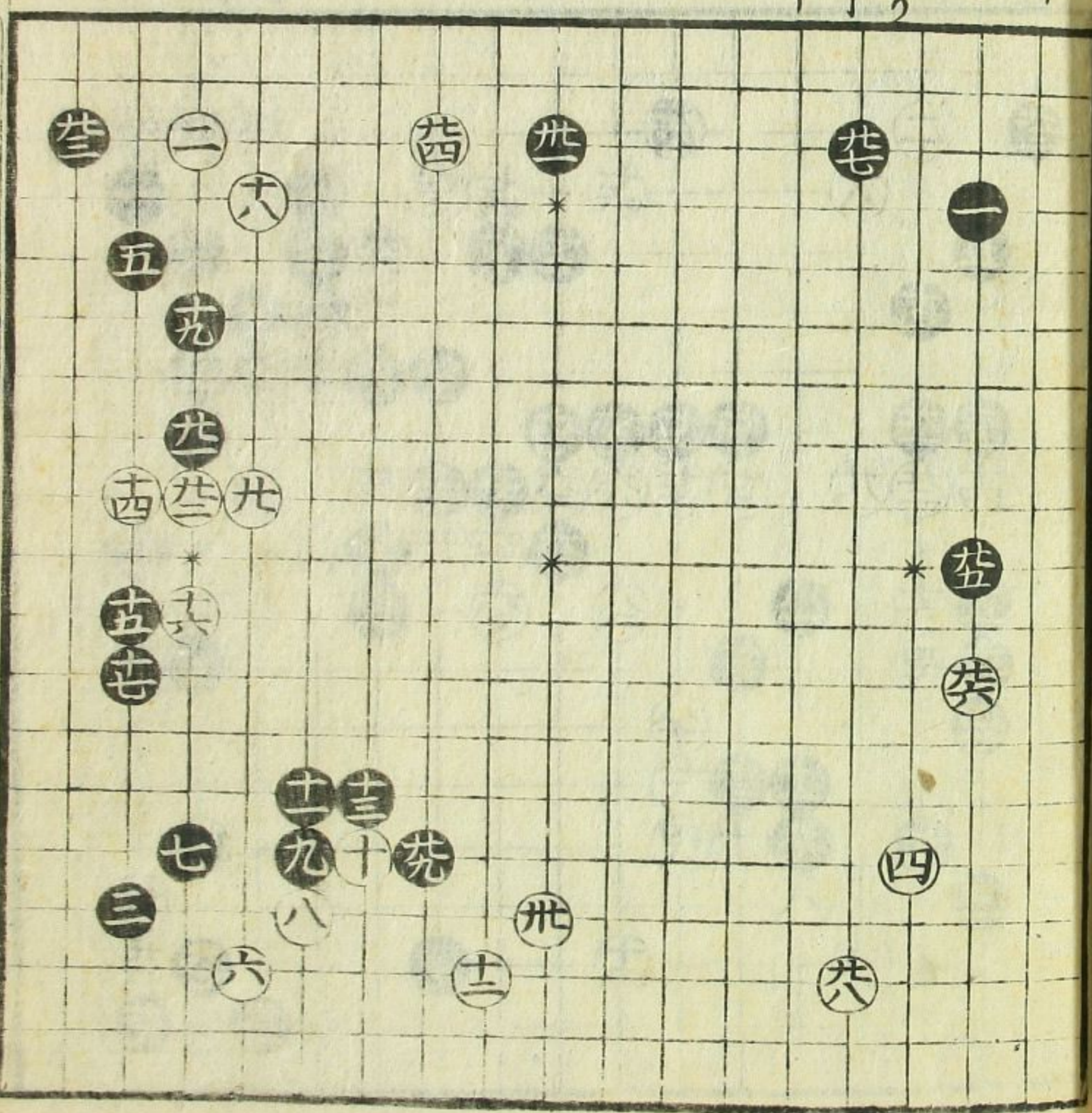
中拾三

三十一まで

ゆめのことゝ黒
てハはるゆめ事
がく黒打



碁の約言
卷之四



碁の約言
卷之四

才拾之三十一

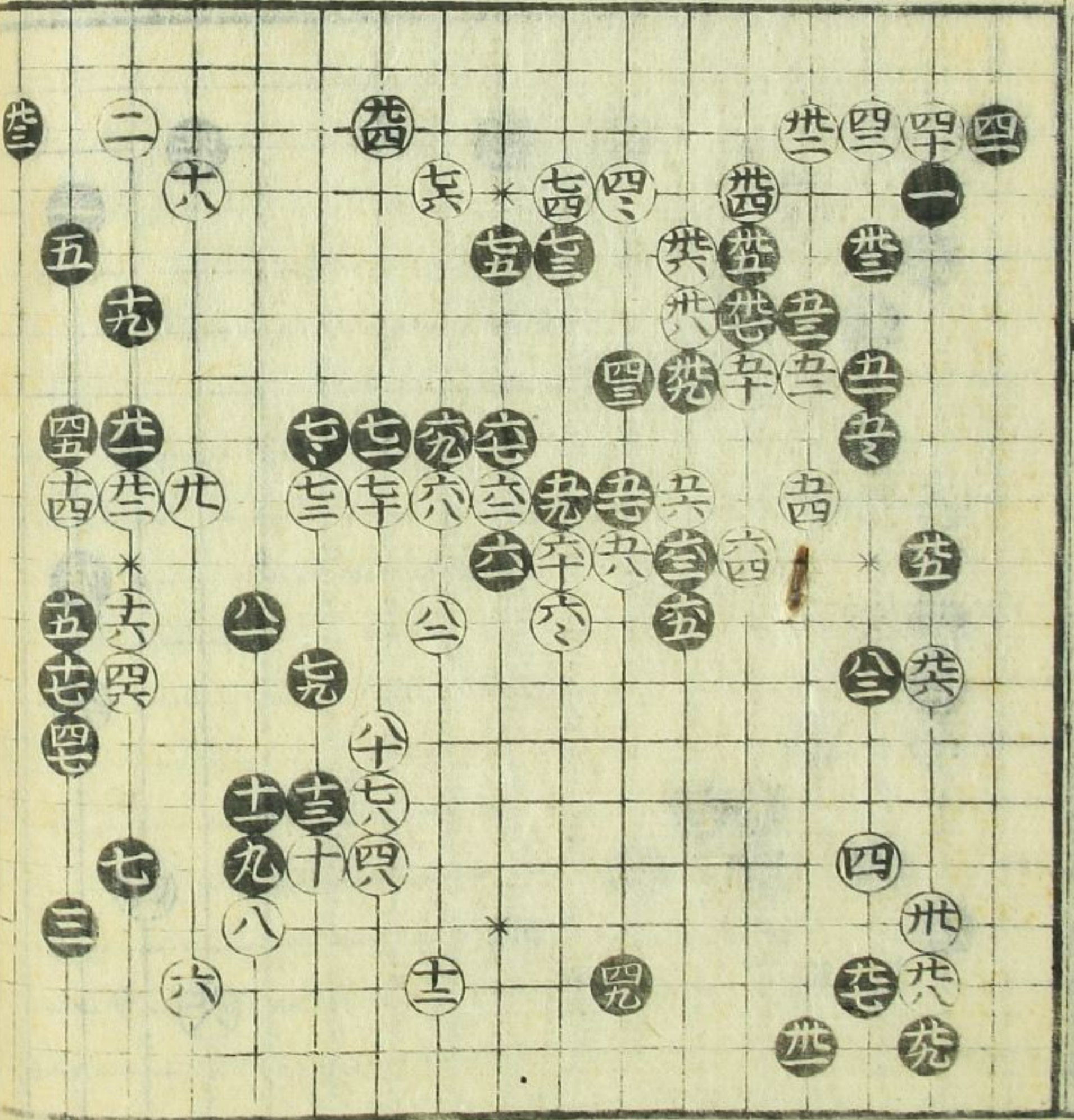
八十二を

かくれこころおそ
も先の勢ひ有る

四八九を孫

口傳

甚立綱節最篇終



甚立綱節最篇終

卷之四

世

